
戦争と剣

空風灰戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦争と剣

【Zコード】

Z3900E

【作者名】

空風灰戸

【あらすじ】

平和な国に戦争が起こった。兵隊召集をかけられたが逃げ出した少年の目標は戦争を終結させることだった。だが、それを決意するには一番の苦悩を乗り越え、老人の助言が必要だった。

プロローグ

ラグナ暦三千年。この世界は平和とされていた。

世界にある街にはしっかりと食料も整い、誰一人、不幸な生活を送つている者などいないともされていた。

しかし、そんなある日のこと。ある国の東側と西側の戦闘が始まってしまった。

これにより、男子は出兵することとなり、女子が働かなければいけないという生活となり、食料は戦争で使われるため、裕福な平和な生活ではなくなってしまった。

そして、ヒューライトタウンでも出兵の召集が来ていた。

「さあ、出兵をする。この町にいる男子は全員集まれ！」

兵隊召集へとやってきた、大人の男が大きな声で言つた。

男子はしぶしぶと外へ出てくる者と東軍のためにがんばるぞと意気込みを持った者の二手に分かれていった。

そんな中。一人の少年だけは家に閉じこもつていていたままだった。

「誰が兵隊召集なんかに行くもんか！」

「富治！ なんてことを言うのです！ 東軍側のためにあなたは力を尽くさないといけないのです！」

富治と呼ばれるその少年は、兵隊召集に行くことを拒んでいた。母親とけんかをしてまでも行く気はないという。

そんな時。兵隊召集の者が富治の家に訪れた。どうやら、男の声を聞いて訪ねてきたようだ。

「おい！ 早くこい！」

「嫌だね！」

「こら富治！ とつと行きなさい！」

「早くこい！」

「嫌だつたら嫌だね！ 誰が兵隊なんかになるもんか！」

「なんだと！ このガキ！ こっちに来い！」

兵隊召集のための男は、富治を捕まえようとした。

すると、富治は部屋に置いてあつた剣を取り出した。

「ほお、剣を使うか。ならば私が勝てばきさまを連れて行く!」

「つむせえ! 僕は絶対兵隊なんかにならねえ!」

兵隊召集の男も剣を取り出し、富治と剣で勝負をした。

だが、その勝負は一瞬で決まってしまった。

富治のすばやい攻撃で、兵隊召集の男は防具を装備しているにもかかわらず倒れてしまったのである。

「俺にかなうわけがないんだよ!」

「富治! なんてことを……」

「大丈夫だ。致命傷には至らじていない。母さん。俺はこの町を出る」

「なんだって! ? 兵隊になれついていてるでしょ! 」

「俺は兵隊なんかになりたくない。絶対にな! 」

富治はそう言つと、家を飛び出し、町の裏口から出て行き、町を後にした。

それから、富治は、ソードシティといつ街に行くことにした。

富治の特技は剣術だ。ソードシティは剣術の達人とも言われる街であるため、戦争中にもかかわらず剣の腕を磨こうといつのだ。

ライトタウンからソードシティまでの距離はたいしてないため、一時間ほどで到着した。だが、富治はそれを見て失望した。

ソードシティを歩いていて見るのは女のみ。男の姿はまったくないのだ。

そればかりは、富治もじょうがないと諦めが付いた。戦争が起つてているのだから、男はほとんどいないことは承知しているからである。

富治が失望したもの。それは、店においてある品物だ。

ソードシティには剣がたくさん売っているといつことでも有りだつた。だが、剣屋を見ると剣など一本もない。ある。

確かに、剣は戦争で使われるからなくなつていてことぐらいは承知

だつたが、まつたくないことはまつたく予想していないことだつた。

「まじかよ……」

失望した富治は、街の郊外へと向かつた。

街の郊外に剣屋や道場があるかもしないと考えたのだ。
郊外に着くと、そこには岩山がそびえていた。山といつてもたいして大きくなはない。どちらかといえば小さながけのしたのような感じだ。

その岩山の下に一つの洞窟があつた。

急に出ていたものだから、泊まるところがない。お金も持つてこなかつたので宿にも泊まれない状況の富治は、その洞窟で一晩を過ごすため、洞窟に入った。

洞窟はそれほど広くはなかつたが、途中で左に曲がるとこらがある。そこならば、入り口からの風もしのぐことができる。
角を曲がると、富治は驚いた。

そこには、一人の老人がすでにいたのだ。年齢は七十代のよぼよぼの老人である。

「誰じや？」

富治は自分のこと。自分の状況や紹介などを老人に教えた。
「なるほどな。ならいいだろう。今晚はここで泊まるがよい」「ありがとうござります」
「ところでおぬしは剣術を学ぶためにこの街に来たのかね？」
「はい。でも、あまり見込みはなさそうです」
「じゃううな。なにやら、男共はみな女を残しどこかに行つてしまつたんじやからな」

富治はその言葉を聞き、老人が今戦争が起つていてことを知らないのだろうか？ ということを考えた。

念のため、富治は今戦争が起つていてることを老人に話した。

「そうじやつたのか……。今戦争が」

「はい。それで、兵隊召集から僕は逃げているんです」

「おぬしも大変じやのう。そうじや。わしは、これでも剣術の道場

を開いていたんじや。おぬしにそれを教えてやるつかの？」「いいんですか？」

「いいとも。せっかくこの街に来たんじやからな」

富治はそれから老人に剣術を学び始めた。練習は、洞窟を出た岩山の前でしていた。

こうして、富治は剣術を老人から、一週間ほど学んだのである。

「つむ。なかなかうまくなつたな」

「ありがとうございます」

「これでおぬしは基本の剣術は学んだ。後は自分で剣術を磨くがよい

い」

すると、岩山前に突然、馬に乗った兵士がこちらに向かつてきた。富治たちはそれをじつと見ていると、その兵士は富治たちの所で馬から下りた。

「兵隊召集だ。ひとつと私と一緒に来い。そつちの老いぼれはいい」「嫌だね！ 僕は兵隊なんかにならない！」

「このガキが。ならば力ずくでもきさまを兵隊としてやる」

兵隊召集に来た男は馬から下りて剣を取り出した。

「俺に剣で勝てると思つてるのか？」

「きわまのようなガキなんかに負けるわけがなかろ」

「言つてくれや。後で泣いたつてしらねえからな」

「それはこつちのセリフだ」

そう言つと、一人は走り出した。互いの剣をまじあわせるのである。

「とりやー、くらえー！」

富治は、押し切り、剣を横に振つた。だが、それは相手にはかすつたぐらいだつた。

「防具をしている私には勝てんわ！ くらえー！」

兵士は富治に切りかかつた。だが、富治はそれを間一髪でかわした。

「それはこっちのセリフだぜ。ここからが本当の勝負だ！」

こうして、彼らの戦いは続くのである。一体、どちらに勝利の女神が微笑むのか。

第01話 「最初の悲しみ」

ラグナ暦三千年。この世界は平和とされていた。

世界にある街にはしっかりと食料も整い、誰一人、不幸な生活を送つている者などいないともされていた。

しかし、そんなある日のこと。ある国の東側と西側の戦闘が始まってしまった。

これにより、男子は出兵することとなり、女子が働かなければいけないという生活となり、食料は戦争で使われるため、裕福な平和な生活ではなくなってしまった。

そして、ヒューライトタウンでも出兵の召集が来ていた。

「さあ、出兵をする。この町にいる男子は全員集まれ！」

兵隊召集へとやってきた、大人の男が大きな声で言った。

男子はしぶしぶと外へ出てくる者と東軍のためにがんばるぞと意気込みを持った者の二手に分かれていった。

そんな中。一人の少年だけは家に閉じこもつていていたままだった。

「誰が兵隊召集なんかに行くもんか！」

「富治！ なんてことを言うのです！ 東軍側のためにあなたは力を尽くさないといけないのです！」

富治と呼ばれるその少年は、兵隊召集に行くことを拒んでいた。母親とけんかをしてまでも行く気はないという。

そんな時。兵隊召集の者が富治の家に訪れた。どうやら、男の声を聞いて訪ねてきたようだ。

「おい！ 早くこい！」

「嫌だね！」

「こら富治！ とつと行きなさい！」

「早くこい！」

「嫌だつたら嫌だね！ 誰が兵隊なんかになるもんか！」

「なんだと！ このガキ！ こっちに来い！」

兵隊召集のための男は、富治を捕まえようとした。

すると、富治は部屋に置いてあつた剣を取り出した。

「ほお、剣を使うか。ならば私が勝てばきさまを連れて行く!」

「つむせえ! 僕は絶対兵隊なんかにならねえ!」

兵隊召集の男も剣を取り出し、富治と剣で勝負をした。

だが、その勝負は一瞬で決まってしまった。

富治のすばやい攻撃で、兵隊召集の男は防具を装備しているにもかかわらず倒れてしまったのである。

「俺にかなうわけがないんだよ!」

「富治! なんてことを……」

「大丈夫だ。致命傷には至らじていない。母さん。俺はこの町を出る」

「なんだって! ? 兵隊になれついていてるでしょ! 」

「俺は兵隊なんかになりたくない。絶対にな! 」

富治はそう言つと、家を飛び出し、町の裏口から出て行き、町を後にした。

それから、富治は、ソードシティといつ街に行くことにした。

富治の特技は剣術だ。ソードシティは剣術の達人とも言われる街であるため、戦争中にもかかわらず剣の腕を磨こうといつのだ。

ライトタウンからソードシティまでの距離はたいしてないため、一時間ほどで到着した。だが、富治はそれを見て失望した。

ソードシティを歩いていて見るのは女のみ。男の姿はまったくないのだ。

そればかりは、富治もじょうがないと諦めが付いた。戦争が起つてているのだから、男はほとんどいないことは承知しているからである。

富治が失望したもの。それは、店においてある品物だ。

ソードシティには剣がたくさん売つていてのことでも有りだつた。だが、剣屋を見ると剣など一本もないものである。

確かに、剣は戦争で使われるからなくなつていてことぐらいは承知

だつたが、まつたくないことはまつたく予想していないことだつた。

「まじかよ……」

失望した富治は、街の郊外へと向かつた。

街の郊外に剣屋や道場があるかもしけないと考えたのだ。
郊外に着くと、そこには岩山がそびえていた。山といつてもたいして大きくなはない。どちらかといえば小さながけのしたのような感じだ。

その岩山の下に一つの洞窟があつた。

急に出ていたものだから、泊まるところがない。お金も持つてこなかつたので宿にも泊まれない状況の富治は、その洞窟で一晩を過ぐすため、洞窟に入った。

洞窟はそれほど広くはなかつたが、途中で左に曲がるところがある。そこならば、入り口からの風もしのぐことができる。
角を曲がると、富治は驚いた。

そこには、一人の老人がすでにいたのだ。年齢は七十代のよぼよぼの老人である。

「誰じや？」

富治は自分のこと。自分の状況や紹介などを老人に教えた。
「なるほどな。ならいいだろう。今晚はここで泊まるがよい」「ありがとうござります」
「ところでおぬしは剣術を学ぶためにこの街に来たのかね？」
「はい。でも、あまり見込みはなさそうです」
「じゃううな。なにやら、男共はみな女を残しどこかに行つてしまつたんじやからな」

富治はその言葉を聞き、老人が今戦争が起つていてことを知らないのだろうか？ ということを考えた。

念のため、富治は今戦争が起つていていることを老人に話した。

「そうじやつたのか……。今戦争が」

「はい。それで、兵隊召集から僕は逃げているんです」

「おぬしも大変じやのう。そうじや。わしは、これでも剣術の道場

を開いていたんじや。おぬしにそれを教えてやるつかの？」「いいんですか？」

「いいとも。せっかくこの街に来たんじやからな」

富治はそれから老人に剣術を学び始めた。練習は、洞窟を出た岩山の前でしていた。

こうして、富治は剣術を老人から、一週間ほど学んだのである。

「つむ。なかなかうまくなつたな」

「ありがとうございます」

「これでおぬしは基本の剣術は学んだ。後は自分で剣術を磨くがよい

い」

すると、岩山前に突然、馬に乗った兵士がこちらに向かつてきた。富治たちはそれをじつと見ていると、その兵士は富治たちの所で馬から下りた。

「兵隊召集だ。ひとつと私と一緒に来い。そつちの老いぼれはいい」「嫌だね！ 僕は兵隊なんかにならない！」

「このガキが。ならば力ずくでもきさまを兵隊としてやる」「兵隊召集に来た男は馬から下りて剣を取り出した。

「俺に剣で勝てると思つてるのか？」

「きわまのようなガキなんかに負けるわけがなかろつ」

「言つてくれや。後で泣いたつてしらねえからな」

「それはこつちのセリフだ」

そう言つと、一人は走り出した。互いの剣をまじあわせるのである。

「とりやー、くらえー！」

富治は、押し切り、剣を横に振つた。だが、それは相手にはかすつたぐらいだつた。

「防具をしている私には勝てんわ！ くらえー！」

兵士は富治に切りかかつた。だが、富治はそれを間一髪でかわした。

「それはこっちのセリフだぜ。ここからが本当の勝負だ！」

こうして、彼らの戦いは続くのである。一体、どちらに勝利の女神が微笑むのか。

「こいつでもくらえ！」

富治はななめに切りかかるようにした。だが、それを相手はかわした。

「そんのはきかねえ！」

「へん！ まだまだだ！」

二人はお互いの力を出しながら、切りかかろうとしている。だが、二人の力はほぼ互角で、どちらが勝つてもおかしくないような状況であった。

その状況が数十分立った時だった。すると突然、相手の兵士が言い始めた始めた。

「お前、ライトタウンの人間か？」

「なぜそれを！？」

「俺はライトタウンで召集をしてからこっちのあまりものを探し召集しに来たのさ。その時、ライトタウンで脱走があったときいいてな、もしかしたらお前かと思つてな」

「くつ、追つ手か！」

「おいおい冗談はよせよ。一人や一人逃げられたからってこまらねえ。そんな奴を捕まえるんだつたら別の奴を捕まえるぞ」

「だつたらどうして」

「そんなことはどうでもいいだろ。それよりお前にいい知らせがある」

「いい知らせだと？」

「そうだ。脱走した奴の母親は死んだんだぜ」

「なんだつて！？」

そのときだつた、兵士は富治の心が動搖したその瞬間を狙い、切りかかつた。

富治はそれにとつさに対応したが、ほぼ遅く、太ももから血が流れ

出したれた。

「くつ」

「ああこれで終わりだ。とつとと私と来るんだな」

兵士は攻撃をやめ、兵隊になるように再度言い始めた。

「それよりも、母さんが死んだって言つのは本当なのか……？」

「本当か。お前は脱走し、召集に来た兵士を倒した。それが問題となり、お前の母親を罪を問われ即刻殺されたのや」

「なんてことを……」

「さあ、それより早く行くが……！」

兵士はそう言つと富治を持ち上げた。そして、馬に乗せようとした時だった。

「バカいつてんじやねえ。俺は絶対兵士なんかにはならねえ！」

富治はそう言つと持つていた剣で兵士の足を切った。

「ぐわっ」

兵士はその痛みに耐え切れず、富治を持つていた手を離してしまつた。それにより、富治は自由となつた。

「これで終わりだ。さあ、お前にそ早くどこかに行つてしまえ！」

「おのれ……！」のかりはいつか返してやる……！」

兵士はそう言つと怪我した足をかばいながら馬に乗り、そのままどこかに行つてしまつた。

「ふう。もう、大丈夫だ。痛」

富治は一件落着したと思つたとき、足に痛みがはしつた。さつき切りかかられたときにおつた傷である。

「なかなかじやつたな。ほれ、少し足を貸してみい」

老人は富治に近づき足に布を巻き、傷口を防いだ。

「ありがとうござります。それじゃあ、俺は行きます。町に戻らなければ」

「母親が本当にそのようなことになつていないといいな」

「はー。それじゃあ、急ぐので」

「ちょっと待ちたまえ。確認が終わつたらもう一度ここに来てくれ

ないかね」

「もう一度?」

「そうじや。どうか、よろしく頼む」

「わかりました」

富治は老人と約束をかわし、故郷のライトタウンへと急いで戻るのだった。

だが、急いで戻るといつても、足に怪我を負っているため、そう早くは行くことができなかつた。

そのため、行きにかかる時間より、三十分ほど余分にかかり、ライトタウンへと到着した。

ライトタウンに戻つてきた富治はその光景に絶望した。
あの美しい町並みと木々はもろくも崩れ去り、まるで、巨大なハリケーンが通過していつたような状態だつた。

富治は絶望をしてしまつたが、母の安否が気になり、急いで自分の家へと向かつた。

だが、そこまで行くのは容易ではなかつた。だが、何とかたどり着いた。

しかし、そこで富治は更なる絶望にさらされた。

家があつた場所には、崩れたがれきがあるだけで、元の家の原型はどじめていなかつた。

富治は必死になり、がれきをどかし始めた。あの兵士が言つたことが本当なら逃げ場がなくがれきの下に埋まつてていると思つたからだ。そのがれきをどかす作業で怪我を再度負いながらも、必死にがれきをどかし続けた。だが、富治一人だけでは、到底一人の人物を探すことは不可能である。

富治自身もそれを承知していた。だが、その不可能を可能としようとし、必死で探し回つた。

それから、数時間がたつたころ、富治はある一つのペンダントを発見した。

「これは母さんのペンダントじゃないか!」

そのペンドントは富治の母が、富治の父と結婚した際の結婚指輪の代わりとして、もらつた、いわば結婚ペンドントなのである。

富治はそれを見つけたあたりのがれきを必死にじかした。そして、ついに発見したのである。

「母さん！」

富治の母は、血色が悪くなつており、息もなかつた。それがすぐにつかつた富治だつたが、母をずっと揺らした。

「母さん！ 母さん！」

だが、それは当たり前のように無駄だつた。すでに息を引き取つているものが揺らしただけで到底息をふきかえすなど考えられないことなのだ。

富治はそれがわかっていた。だが、それでも必死に揺らした。そして、ついに富治は母をあきらめた。そう、受け止めたくない現実を受け止めたのだ。

富治はそれから、父が眠つている町外れの墓場まで母を連れて行つた。

墓場は、土に墓石があるだけのため、土を掘ればすぐに母を埋めることができた。

富治は悲しみながら。そして、母に最後の別れを告げながら埋葬した。

それから、富治は墓石の前で泣き叫んだ。

母は自分が逃げたから殺された。自分さえ逃げなければ母は死なずにするんだ。そういう罪悪感もあつた。

そして、富治がふと気が付くとあたりは一面真つ暗になつていた。町は雲に覆われ、光など差していなかつたため、一段と暗くなつていた。さらに、雨までも降つてきた。

まるで、富治の悲しみにおいうちをかけるよう……。

「富治いいのよ。あなたのせいではないわ。あなたは好きな道を行きなさい」

すると、富治は母の言葉を聞いた。富治はそれを聞いた瞬間、あ

たりを見回した。

だが、当然母は埋まっているのだから、あたりにいるわけはなかつた。

「母さん……」

富治はそれを聞き、涙でぬれた目を拭いた。

そして、東軍を絶対に倒すということを胸に決めた。母をこのようなことをした東軍が許せないのだ。

富治はライタウン南東にある東軍の首都である、イーストシティへと向かうことにした。

そう決心し、イーストシティに向かおうとしたとき、富治はふとあの老人が言った『確認が終わったらもう一度ここに来てくれないかね』という言葉を思い出した。

富治はイーストシティに早く行きたかった。だが、老人との約束を捨てるとはできない。

とりあえず、富治は、母の仇を討つのは後にしソードシティの老人のところへ戻るのだった。

第02話 「古代の戦争」

母を失つた悲しみにくれながらも富治はソーデシティの老人がいた洞窟まで戻つた。

洞窟の前には老人はおらず最初にここに来た時と同じように洞窟の奥まで入るとそこに老人はいた。

「おう、帰ってきたか。どうじやつたか？」

富治はそう聞かれたがなにも言わなかつた。それを見た老人は状況を察した。

「そうか……。はつたりじやなかつたといふことじやな……」

「俺……。俺……」

富治は重たい口を開いた。今の自分の心境。母を失つた悲しみ。東軍への怒りを老人に伝えたのだ。

それを聞いた老人は言つた。

「おぬし、古代の戦争について知つてあるかの？」

富治は首を横に振つた。

「そうか。なら話してやろう。昔々。今から、何千年と前のこどじや。その時代は作物が非常に豊かで貧しい生活を送つている者などいなかつた。そんな、平和な日々が続いている時、戦争が勃発した。その戦争により平和は乱れ、平和という文字はなくなつた。そんな中。ある一人の少年とその友人達とが三本の剣を持ち、戦争を終結するために旅に出たという。その中の一人の少年は肉親を失い殺した軍を憎んだが、友人達に慰められ、戦争をとめるということを考えたという。そして、その少年達はついに戦争を終結させたという。

そのときに使つていた剣は戦争をとめた剣とされある神殿に安置されたという

富治はその話に耳を傾けていた。最初はどうでもいいと思いながら聞いていたが、後になつてくるとその話に興味がわいてきた。

だが、その話しが今の富治が受け開けた状況と関係がないのに気づき、富治は言った。

「それがどうしたというのです？」

「気が付かんか。まあよい。今はそのような気持ちではないのだろう。これから、東軍を倒しに行くというだな？」

「はい……。母さんをあんなふうにしてしまったのは俺のせいです。ですが、東軍も母さんをあのよつにしたんだ。絶対に許せない！」

「少し頭を冷やしていくといい。今日はここに泊まりたまえ」

「いいです。俺はイーストリティに行かなれば」

「まあ落ち着け。少しやすまんと体がもたんぞ」

老人はそう言い富治をなだめ、彼をこの場に泊ませることに成功した。

その夜。老人は先ほどの昔話を富治に聞かせてから眠らせた。

富治は寝るときに老人の話を思い出していた。東軍を早く倒したいという気持ちがあるにもかかわらず、老人の話を聞くかどうか一時的に和む。それがどうしてかわからなかつた。

富治はその答えを探し出したいと思いながら、眠りつづけていた。

次の日。富治があきると老人はすでに起きていた。

「おお、おきたか。ちゅうじょおこしに来たところじゅ。じゅじゅ？」

田覚めは？

「悪くないです」

「そうか。それはよかつたな。まあ、朝飯でも食べよう。外へ出たまえ」

「あの！」

老人が外に朝食を食べるため洞窟の外に行こうとしたときをそれを富治が止めた。

「なんじゅ？」

「あなたが昨日してくれた話。あれは実話なんですか？」

「さあな。何しろ言い伝えじゃからそれはわからん」

「そうですか……」

「それがどうかしたのかね？」

「昨日寝るときに考えていたんです。あなたが話してくれた話。あれは俺のことをあらわしていたんじゃないですか？」

「……」

「肉親を軍に殺された。この肉親は俺の場合母さん。そして、憎んでいるのは俺。どう考へても俺と一致しています。あなたはもしかして、俺に戦争を止めるように仕向けていたんじゃないですか？」

「……。そうじゃ。古代の戦争でのこの話。この話と一致しているのが現代じゃ。平和な時から戦争におきる。まさに現代と同じじや。話の中で戦争をとめたのは、肉親を殺され軍を憎んだ少年。まさしく、君と同じだ。その君なら今の戦争をとめることができるのはないかと思つたのだ」

「やはりそうでしたか……。俺は不思議だつた。あなたが話したそれを聞いたら心が和む。これは俺と同じだつたということからだつたんですね。俺……決めました。あなたの言つその話を信じます。俺戦争を止めてみせます！ そして、俺のように親を……大切な人をなくした悲しみを受ける人を少なくするために！」

「よく言つてくれたな。わしもそれを望んでいたのじゃ。さあ、までは朝食を食べよう」

一人は朝食を取つた。そして、朝食後に老人は富治に赤い燃えるような剣を富治に差し出した。

「おぬしにこれをやる！」

「この剣を？」

「ああ。ただし、やるといつてもおぬしの剣と交換じゃがな」

「俺の剣とその剣を？ その剣はこの剣と価値が違うんじゃないですか？」

「気にせんでよい。さあ、交換するのか？ 交換しないのか？」

富治はその剣をじっくりと見た。すると、赤い剣はとても赤々とした色が富治の心を奮るさせた。

そして富治は言った。

「わかりました。この剣と交換しましょう」

富治は鞘から剣を取り出し老人に渡した。老人はそれを受け取ると富治に赤い剣を渡した。

「がんばりたまえよ。この戦争を終結させてくれたまえ」

「はい！」

「ここから北北西に向かうとランドタウンという町がある。まずはそこに行くといい。何かしらの情報があるかもしれませんからな。それから、決して修行を怠るんじゃないぞ」

「わかりました。いろいろとお世話になりました。お元氣で」

「おぬしもな」

富治はソードシティ郊外の岩山を立ち去り、次の町として、ランドタウンへと向かうのであった。

しかし、富治の戦争をとめる旅が始まったのであった。

第03話 「新たな出会い」

「つかれたあ……。いい加減休みたいぜ……」ソードシティを去り次の目的地であるランドタウンに向かつていった富路。

だが、ソードシティからランドタウンへ行くには、ランド山を越えないといけないため、富治は山登りをしていった。

富治は体力には自身があつた。剣術は体力を使うものもあるし、ランニングもしていたからだ。

だが、ランド山は道が「ゴツゴツ」しており、普段の山登りより体力を使う道ばかりだったため、ばたばたの状態の富治だった。

そんな状態でも登山をしていた富治だったがついに日がくれあたりはそろそろ暗くなり始めていた。

富治はその様子を見て、今晚はこの山で野宿することを決意し、野宿できそうな場所を探し始めた。

だが、なかなかいい野宿をする場所はなく、結局、見つける前に日が沈んでしまった。

「仕方ない。多少悪くとも寝れそうな場所だったさつきの場所まで戻るか……。おや？ あれはなんだ？」

富治があきらめて道を戻ろうとしたとき、一筋の光が富治の目に飛び込んできた。

その光はぼうぼうとゆれており、赤い光だった。それを見た富治はその光が照る場所に近づいていった。

その場所は洞窟で、中には人が三人いた。一人は男。一人は女。男の片方は背がもう片方より小さかった。どうやら、親子のようだ。

「すいません」

富治が洞窟内に入りそう言つた。すると、父親と思われる男は鞘から剣を取り出した。

「きさま兵隊召集に来た奴だな！ ここまで追つてくるとはしつこ

いやつめー！」

「待て待て！　俺は兵隊召集に来た奴じゃない！」

「問答無用！　そんなことを言ひて私たちを連れて行く氣だらうー。ここで倒してやる！」

男はそう言ひと富治に走つて近づききりかかつってきた。

富治はそれを回避するのではなく、自分も剣を取り出しその攻撃を防いだ。

「本当だつて！　俺は兵隊召集になんか来ていない！　それに俺だって招集される側の人間だ！」

富治がそう言ひと男は怒つたような表情から申し訳なさそうな表情に変わりながら、剣を鞘にしまつた。

「なんと……。では、あなたも兵隊招集に追われているのですか？」
「追われてるかは知らないけど……。追われる身であるのは確かだ」「それはなんと手荒いことをしてしまったことか……。少し中に入つていただけますか？　いえ、ささやかですがお詫びを」
男はそう言ひと富治を洞窟内に招いた。そして、そこで水を一杯と焼いたジャガイモを一個くれた。

「ありがとうございます」

「ところであなたも兵隊招集から逃げているようですが一体どうしてここに？」

「ランドタウンに行こうと思つて。ソードシティから来たんです」「ランドタウンへ？　とんでもない！　私たちはランドタウンから逃げてきているんですよー！」

「ランドタウンから？　じゃあ、ランドタウンにも兵隊招集が？」
「ええ。そして私たちともどもここに隠れ住んでいます」
そう言つたのは始めて言葉を口にした紅一点の女性である。

「そうでしたか……。じゃあ、ランドタウンに行つても何もないかなあ」

「ランドタウンに向のよつがおありなのですか？」

「いや、特に用があるわけじゃないんですが、この戦争をとめるた

めのヒントがあるかもしれません」と思いましたので

「戦争をとめる？」

「そう言つたのは一人の子供であると見られる少年だ。

「ああ。俺はこの戦争を終結させるための旅をしていくんだ。まあ、旅といつてもまだ数日しかたってないけどな」

「すごいやー。戦争をとめるために旅をするなんて…」

「そりか？ まあ、自分で言つのも変だけどす」「ことなのかな。死と常に隣り合わせになりそудし」

「なるほど。あなたは勇敢な方ですな。ですが、ランドタウンにはそのようなヒントなどないと私は」

「まあ、とりあえず行くだけ行くつもりです」

「そうですか。 ところで、今晚は泊まるところがおありますか？」

「いえ。今のところ決定はしていませんが、とりあえず場所は決めてあります」

「ならばここに泊まりなさい。あなたが入つても私たちは不自由しませんので」

「いいんですか？ ならお言葉に甘えて」

「どうぞどうぞ。たいしたものなどありませんが。あ、申し遅れました。私は空下來夏。家内は空下來鶴と申します。そして……」

「俺は川原富治です」

自己紹介を済ますと空下來家の人に剣の練習をしてくると告げて富治は外へと出た。

次の日の朝。富治は早く起きた。あたりを見回すとそこにはあの少年だけがいなかつた。

富治は彼を探すため洞窟の外へ出た。すると、どこから音が聞こえてきたため、富治はその音のするほうへと向かつて行つた。

すると、そこではあの少年がなにやら呪文を唱え木に攻撃をしていた。

「朝からす」「ことじやつているな」

富治はそう言って彼の前に現れた。彼は少し驚いたような顔をしていたが、すぐにもとの表情に戻した。

「うん。毎朝やつてるんだ。僕の術が衰えないよ。」「

「そうだったのか。そう言えば君の名前は聞いていなかつたね。なんて言つんだい？」

「僕は空下風紋って言つんだ」

「ふうもん？　すゞい名前だな」

「でしょ？　僕もそう思つんだ。でも、この名前が嫌じゃないよ。

ところで今日はもう行っちゃうの？」

「まだ行かないぜ。風紋の両親に挨拶をしてから行くつもりや」

「そう……。がんばってね

「ああ。風紋もがんばれよ」

洞窟に戻ると来夏と美鶴はおきていた。富治は出て行くことを告げると、朝食だけでも取つていけど言われたため、それに再度甘え、朝食を取つた。

「……」

その姿を見ていた風紋はとても悲しそうな顔をしていた。それを見た来夏は風紋に言った。

「風紋。お前も行きたいのか？」

「うん……。僕だって戦争をとめるための術があれば行きたい。でも、僕の術はまだ未熟だしそれに恐い……」

「お前は努力はしているのだからいずれかは強い術を身につけるだろ。だが、お前がそれを身につけてもその恐さを取り払わねばいつまでたつても戦争をとめる旅などできないだろ。ならばその度胸をつけるために彼についていつてもいいのだぞ。術などは旅をしていくうちに強くなるだろ」

「父さん……」

「父さんは風紋一人で行かせるより彼のような人と一緒に行つてくれたほうが安心できる。行きたいと思うならば行けばいい

「やつよ。行きたいなら行きなさい。」のままでは心残りとなってしまいますよ」

「母さんも……。わかつた。僕は行つてくれるー。そして絶対にこの戦争をとめて見せるよー。」

「ああ。父さんも母さんも期待しているぞ。旅が終わったら元気で来なさい」

「うんー。じゃあ行つてくれるねー。」

「がんばれよー！」

風紋は富治が歩いていった道を走つていった。

その姿を見ている風紋の両親は少し悲しげな顔をしていた。

「風紋を見守つてあげましょ。風紋が無事に戦争をとめることができ、ここに帰つてくることを」「やうだな……。彼のやうな勇敢な青年がいるんだ。風紋も大丈夫だろ？」

その頃富治はラングド山の頂上にたどり着いていた。

「おー。あれがラングドタウンかな？」「

頂上から見える小さな町。あれがラングドタウンのやつだ。どうやら、ラングドタウンは町が崩壊しているように見える。

「ライトタウンの二の舞か……。とりあえず生存者探しでもしないとな」

「富治君ー。」

富治が下山を始めようとしたその時、後ろから声が聞こえたので後ろを振り返つた。すると、そこには風紋が走つていた。

「どうしたんだ風紋？」

「お願いがあるんだ。僕を君の旅に同行させてくれないか？」

「え？ いいけど、両親はどうするんだ？」

「ちゃんと話はしつけてきたよ」

「……。風紋。これは遊びじゃないことはわかってるな。この旅は死と隣り合わせになる旅になると思つ。それは覚悟してるんだな？」

「うん。それぐらいはわかってるよ。僕は戦争をとめるために術を

学んだんだ。その術を使う時でもあるじ。僕は度胸もつけないといけないんだ」

富治は風紋の田を見た。風紋の田には恐怖というものが少し見えたが、それ以上に期待と戦争をとめるという考え方の方がよく見えた。「わかつた。一緒に旅をしよう!」「ありがとう、富治君」「富治でいいよ。わあ、行け!」「うん!」

富治は新たな仲間『風紋』を加え、ランダタウンへと向かうのだった。

第04話 「ランドタウンの悲劇」

新しい仲間『風紋』を旅に加えた富治は、ランドタウンへと到着した。

ランドタウンはランド山から見たように崩壊しており、男も見当たらなかつた。

「こりやひどいな」

「うん……。この様子じゃ僕の家もダメだらうな……」

「とりあえず風紋の家に行くだけ行ってみようぜ」

富治は風紋の案内で、風紋宅を訪れた。そこはやはりがれきの山となつていた。

風紋はその現状を受け止めたくないのか早くその場から立ち去りたいといつてきたので富路はすぐに場所を変えた。

風紋のその気持ちを富治は理解していたからでもある。富治自身も家がなくなり母も失ってしまっているのだから。

彼らはランドタウンの中心部にあつた噴水広場へと足を運んだ。「じゃあ、ここから他の人の手助けをしてあげよう」

「うん」

富治と風紋は周りで大変そうな人たちから優先的に作業を手伝つてあげた。

時にはがれきをどかし、時にはお年寄りの手助けをしたりと忙しい時をすごした。

それから数時間たつと二人は噴水広場で休憩を取つていた。

「ふう、結構疲れたな」

富治が言つた。

「うん……。でも、まだまだ残つてるんだ。がんばろう富治

「ああ。ん？」

富治が少し遠くを見ると、誰かが馬に乗つて一いちじゅくと十人ほど向かつてきている。

鎧をまとうて、腰には鞘がある。

「まさか……。おい、風紋。あれ」

富治は風紋にそれを伝えた。

「もしかしてあれは……。みんな！ 急いで隠れて！」

風紋は大声で言つた。その声に最初は戸惑つていたランドタウンの民だつたが、風紋が何回か言つたことによりちゃんと隠れてくれた。

そして、富治と風紋も隠れた。

「やつぱりあいつらは……」

「うん。西軍の兵士達だよ。たぶん、この状況には西軍がやつたんだろうけどもう一度確認のために戻つてきたんだろう。男子がいいことをいいことに攻め込んできただろうね」

「西軍？ 東軍じゃないのか？」

「あれは西軍だよ。あの鎧の腕の部分に西軍の印がついているもの。あ！ やつてきた。富治、静かにあいつらの様子を探ろう」

西軍の十人の兵士達は先ほどまで富治たちが休んでいた噴水広場へと入つてきた。

そこで馬をとめてあたりを見回した。

「誰もいないようですね」

兵士の一人が言つた。

「ああ。しかし変だな。このあたりにほかに街などない。逃げるこ^トなどできるはずはないのだが」

「全員がれきの下敷きになつてしまつたんじゃねえですかい？」

「それはない。最初に来た時に生存者がいたはずだ。そいつらを始末するために戻つてきたのだからな。おい、ちゃんとそこらへんを調べる」

兵士の一人がそう言つと他の兵士はあたりを調べ始めた。

これでは隠れている民がすぐに見つかってしまう。そう思つた風紋は思い切つて姿を西軍の十人の兵士たちの前に現した。

それに続き富治を姿をあらわした。

「おい、男がいるぜ」

「まじかよ。東軍の奴らも馬鹿だな」

「ここの町を壊したのはお前らだな?」

風紋が聞いた。すると、先ほどから指示を出していた兵士が言った。

「そうだ。それがどうしたといつのだ? きさまらには関係ないことだろう」

「なに!」

「おい! こいつらをやつちまつぞ!」

首領と思われる兵士がそう言つと、全員馬から下りてきた。

そして、剣を取り出して構えた。

それに応じて富治を剣を取り出した。風紋は術を使う準備をしているのだ。

「かかれ!」

その一言に兵士達は一斉に攻撃をしてきた。

富治は一人一人をできる限り行動できなくなる程度の攻撃を続けた。

いちいち一人を倒すより動けなくし相手の力を弱めさせようというのだ。

だが、一人対九人ではそれをすることも難しい。それどころか、かわすので精一杯の部分もあつた。

しかし、それをサポートしたのが風紋だった。

風紋はその術を使い二人から三人を一気に攻撃した。

「ウインドノヴァ!」

風紋はそう言つと光の如くわざを使う。それは、目に見えない速さで見えるのはその輝かしい光だけだ。

風の上に星が乗つて移動しているようなわざである。

富治はその援護によりどんどんと兵士を倒すことができた。

ウインドノヴァのおかげで、相手はそれに集中しているため富治の存在を忘れがちになっているため、富治に対する隙が多いのだ。

そして、数十分で兵士九人を倒し指揮官のよつたな兵士だけが残つた。

「むう……。なんという実力だ……」

「まあ、お前で最後だ」

富治は剣で指揮官兵士を指した。

「いいだろ？ 私が相手になつてやる」

そう言つと馬から降りてきて、剣を出した。

「行くぞー！」

指揮官兵士は切り込んできた。

富治はそれを剣で防ぎ身を守った。

「それだけか」

「なに！」

富治は思いつきり剣を押し返し、指揮官兵士を地面に倒させた。そして、富治は剣を倒れている指揮官兵士に突き出した。

「くつ」

「これでお前の終わりだ。たいしたことがないな。おい、風紋。こいつはどうする？

「えつ？」

風紋の声の調子が変わっていることを富治は感じた。

さつきまでは強気の姿勢だったが、今はランド山であつたときと同じような調子だった。

「えつ？ ジやないぜ。こいつはどうするんだよ？」

「どうするっていつも……。かわいがりだから、逃がしてあげた

「うー」

「そんなんでいいのかよ？」

「いいよ。その人が反省しているならね」

富治は指揮官兵士を見た。すると、死を覚悟している様子だった。

「お前……生き残りたいか？」

「ああ……。だが、もう死んでもよい。それもなどに頭を上げるべからざらな

「やうが」

富治はそう言つと剣をしまつた。

そして、兵士にどこかに行くよつて言つた。

「さあ早く行け！」

「ちつ、覚えてるよ」

指揮官兵士は馬に飛び乗りさつそつと去つていった。

そして、一息つき風紋と一緒にランドタウンの民にもう大丈夫だということを伝えた。

それからまだ終わっていない作業を再開した。

そうするしていると一口がすぎた。まだまだ作業が残つてはいたが、次なる目的地に行かねば行けないので一人はランドタウンを後にすることを民に言つた。

「がんばってくだされ。あなた方の成功をお祈りしています」

民のほとんどがそのよつな意味を持った言葉を言い、一人の成功を祈つた。

そんな民が言葉を言つてゐる時に一人の老婆が一人の田の前に現れ話し始めた。

「おぬし達戦争をとめる旅をしてるんじゃとな？」

「ええ。そうですよ」

「もしや伝説の剣については存知かね？」

「伝説の剣？」

「ああ、それなら知つていますよ。昔の戦争をとめた人たちが使つていたといわれる剣のことですね」

「そうじや。よく知つとるな。なら話しさ早い。戦争をとめるならばその剣を探すといい

「でも、その剣がどこにあるかなんて……」

「場所なら知つとる。おぬし達はハイブリッド神殿を知つてゐるかね？」

「ハイブリッド神殿は知りません」

「富治。僕は知つてゐるよ。ここから南西に行つたところにある神殿

だよ

「そうじや。そこには安置されているところがわかれている。そこに行くと

よい

「わかりました。そこに行つてみることにしてます」

「うむ、がんばってな」

「ひして二人はラングドタウンを後にした。

そして、伝説の剣が安置されているというハイブリッド神殿に向
けて旅立つのであった。

第05話 「愛する者の存在」

「なあ、ハイブリッド神殿まではどれくらい時間がかかるんだ？」
富治が風紋に聞いた。

ランドタウンを出発して、ハイブリッド神殿を目指していく富治たち。出発前に老婆から聞いたハイブリッド神殿を目指して旅することになったのだが、肝心の神殿の場所やどれくらいの距離があるかどうかまでは富治は知らなかつた。

「それはわからないけど、ハイブリッド神殿っていうのは”ガレアタウン”の近くにあるんだ。ガレアタウンからハイブリッド神殿に行くには、フレア洞窟つていところを通らなきゃいけないんだけどね」

「ふーん。じゃあ、そのガレアタウンまではどれくらいなんだ？」

「え？ それもわからないけど……。今いる場所からそこまでいくには、フラッシュショシティに行つて、ガイアマウンテンを越えればいいけるよ」

「そうか。フラッシュショシティなら知つてゐる。ライトタウンから南西に行つたところにある街だからな」

フラッシュショシティにやつてきた富治と風紋。
フラッシュショシティは光り輝く電気街であることで有名で、眠らない街としても有名だ。

だが、今はその面影がまつたくなかつた。光などまつたくなく、金属類は錆びてしまつてゐる。そして、この街にも男の姿はない。「こりやひどいな」

その光景を見た富治はそう思つた。以前来たことがあつた富治にはそれがすぐわかつた。

そう思いながらも、かねて相談していた食料調達をすることになつた。

もともと、宮治も風紋も急に旅にでることになつたから食料などあまり持つていないので。

ランドタウンで集めようと思えば集められたが、厳しい状況を強いられてくるランドタウンから食料集めなどすることは外道である。

食料調達をしていた宮治と風紋。いろんな店を回り食料を調達していたが、ある店で出会つたしました。

「おい！ こいつは全部もらつていく」

馬に乗つた騎士たちは、店に並んでいる食料を全部カゴの中に入れた。

「ああ、お待ちください！ それを持っていかれたら商売になりません！」

「つるわい！ 我が軍の勝利に貢献しないというのか！ ならばさまは首吊りだぞ！ ん？ おい、そこのお前、うちを向いてみる」

その男は店内にいた宮治と風紋を見ながら言つた。彼らは騎士たちに背中を見せていたため、顔はまだ見られていない。

だが、状況的に顔を見せなければいけなくなつたため、二人は騎士たちに顔をさらけ出した。

「きそまら、男だな？ ここでなにをしている？」

「食料調達だ」

「食料調達だと？ 我が軍のものか？ いや、その姿からして軍のものじゃないな？」

「そうさ、軍なんかに入つていない」

「ならばこちらにこい！ 軍に入れてやる！」

「嫌だね！ 風紋！」

「うん！」

風紋は術を使い、騎士たちをその場から少しばかり吹き飛ばした。

そして、富治は馬の足に切りかかつた。

それにより馬は暴れだした。その隙に宮治と風紋はその店から逃

げ出した。

「成功だね。富治」

「ああ。だけど、まだ完全に成功じゃないな」

富治は指を後ろへ向けた。それを見た風紋が後ろを向くとそこには馬を乗り捨てた騎士たちがこちらへ向かつて走っている。

「しつこい奴らだね」

「ほんとだよ」

富治たちはとある軒の部分で曲がった。すると、ちょうど軒と軒の間に隠れそうな場所を見つけたので二人はそこに隠れた。そこに入り込んできた騎士たちはそのまま、その場所に気づかずどこかへ行つてしまつた。

あたりが静かになるまで待つてから、一人はその場から出た。

「ふう、撒いたな」

「うん」

「あなた達なにしてるの？」

撒いたと思った二人に話しかけてきた人物がいた。声は女の声だつたためそれほど驚きはしなかつたが、刹那、追つ手が来たかと思つた。

その声の主の招待は隠れていた場所の片方の家の人物だった。髪はショートで、年齢は子供。たいていの人はその子をかわいいとうだらう。

「え？ ああ、ちょっと追つ手がいたから撒いたんだ」

「追つ手？ 今の騎士たちのこと？」

「そうだよ」

「なら落ち着くまでこの家にいるといいわ。どうぞ、入つて」

その子は彼ら一人を家の中に招きいた。そして、イスに座ると彼女はお茶を持ってきた。

「悪いね。かくまつてもらつて」

富治が言った。

「いいえ。ところで、騎士たちに追われていたってことは兵隊召集

から逃げ出してこるの？」

「まあ、そんなところかな」

「…………。どうして？」

「え？」

「どうして兵隊召集から逃げるの？ 兵隊召集に逆らつたら殺されるのよ」

「どうしてって言われてもなあ」

「だね……。これは兵隊召集から逃げている理由になるかわからないけど」

と、風紋が話し始めた。

「僕たちは、この戦争をとめるために旅をしているんだ」

「戦争をとめる旅？」

「うん。この世界でどうしている間にもいろんな人が死んでいいってい。そんな犠牲者を少しでも減らすため僕たちは旅しているんだ」「そして、ここに来たのはハイブリッド神殿というところに行くためなのだ」

それを聞いた彼女は少し沈黙を続けた。そして、こう呟いた。
「恐くないの？ 戦争をとめるなんてことをするなら自分達が傷つくこともあるのよ。兵隊召集より危険なことよ」
「恐いや。こんなことをするのに恐くないやつなんていないと思う。でも、俺は母さんのためにも、俺みたいな犠牲者を増やさないために戦争をとめるって決心したんだ！」

それを聞いた彼女は目を大きく開いた。どうやら、その富治の決心に驚いているようだ。

「……。ねえ、私もその旅に同行させてくれないかしら？」

「え？ でも、危険な旅だよ？ 自分でもそのことはわかってるんでしょう？」

「わかりていますとも。でも、私もその旅に行きたいの。 私には愛する彼がいるわ。彼は優しく人を殺せるような人じゃない。でも、そんな彼も今は兵隊になっちゃって、安否がわからない。私は

そんな中不安なの。彼が生きて帰つてきてくれるかって……

だから、彼が醜い目に会わない前に戦争をとめることができれば再会できると思うの」

「……。本当に危険な旅だぜ？」

「わかつてゐるわ。彼が危険な目にあつてゐるのに私だけあつていな
いなんて変ですもの」

「わかつた。君を連れて行こう」

「富治！」

「この子もいろんな決意があるんだ。意見を尊重してあげたい。と
ころで君の名前は？」

「私は、林彩音。回復わざとかの魔術を得意としてるわ」

「術師なの？」

風紋が聞いた。すると、彩音はうなずいた。

「僕も術師なんだ。回復わざはつかえないけど……」

「そうなの……。じゃあ、私が回復術を使ってあなたは攻撃術を使
えばいいわね」

「うん。あ、僕は空下風紋っていうんだ。よろしく」

「俺は川原富治だ」

「二人ともよろしく」

「よし！ じゃあ、ガイアマウンテンに行こう！」

こうして、富治に新たな仲間である彩音が増えた。三人になつた
旅の次の目的地はガイアマウンテンだ。

第06話 「縁の剣」

かつての戦争は巨大なる木々の山で終結を迎えた。両軍の中間に位置するその山はちょうど攻めかかる時にぶつかりあう場所なのだ。そして、富治たちは今、中間に位置する山 ガイアマウンテンに来ていたのだった。

ガイアマウンテンは木々に囲まれており、あたりを見渡せばそこには木と土しかない。

ガイアマウンテンを通りにはちゃんとした道があるのだが、その道は軍によつて監視を続けられており、富治たちは凸凹の土しかな道を通つて頂上を目指していた。

「はあはあ、いい加減疲れたよ……」

風紋がそうつぶやいた。

「がんばれ、風紋。俺だつて疲れているけどがんばってるんだよ」

「そんなこといつても……。彩音ちゃんは大丈夫？」

「わ、私もそろそろ……」

小さな声で彩音が言つた。二人とも相当疲れているのを悟つた富治は少し休憩をとることにした。

チュンチュンといつ鳥の声が聞こえる。鳥は自由だ。戦争が起つても空を飛んでいる。戦争がなくとも空を飛んでいる。

富治は鳥の音をしみじみ聞きながら休憩をしていた。

すると、鳥の声がやんだ。すると、あたりは静寂に包まれた。そんな静寂を破つたのは風紋の一聲だった。

「富治、そろそろいかない？」

「あ、ああ。彩音もいいか？」

「ええ、いいわ」

三人は立ち上がり頂上を目指して再度上り始めた。

それから何時間もたつたとき、富治たちは頂上にたどり着いた。

頂上に着いた彼らはそこからの景色を見た。

来た方向を見れば、ライトタウン、ソーデンティ、ランダタウン、
フラッシュコシティ……たくさんのお城が見える。

逆の方向を見れば、複数の街が見える。一番近くにある小さな町
がガレアタウンだろ？

そして、一番遠くに見える渓谷……あれこそがハイブリッド神
殿があるという場所だろ？

「さあ、行きましょう」

彩音はそうじつて歩き出した。

「西軍領域に行くか……」

「じこからか謎の声が聞こえる。富治たちは輪になり四方を確認し
た。富治は剣を抜き戦闘態勢に入っている。

「誰だ！ 姿をあらわせ！」

「おんなかな東軍の民よ。西軍領域に行くとこ？」

「そうだ！ なにが悪い！」

「おんなかな……」

その声が聞こえると、富治の田の前から男が突如現れ富治に切り
かかってきた。

富治はそれを剣で押さえたため、無傷だった。

「なかなかやるな」

「不意打ちとは卑怯な！」

「……」

突如現れたその男は富治の赤い剣をじっと見ている。富治は逆に
男の剣を見た。その剣は緑色に輝く剣だつた。

「なるほどな。いいだろ？ 赤い剣を持っているお前。私と戦え。
そして、後ろのお前達は手出しをするな

「な！ そんなことをしようちできるわけないでしょー！」

「まで、彩音。いいだろ？ その戦いつけて立つ！」

「富治ー！」

「どうせお前を倒さなきゃ、じこを通してくれないんだろ？ だつ

たら、戦つてやるよ

「よくわかっているな。……行くぞ！」

緑の剣を持つ男は切りかかってきた。富治はそれを剣で抑える。そして、押し切り相手の溝に切りかかった。

だが、男は負けていない。ちゃんとプロテクターを着けているようだ。

男はさらに切りかかってきた。富治はそれを抑えるために剣を前に出した。

しかし、男は上に攻撃をするのではなく脚に攻撃をしてきた。

「ぐわっ」

「まだまだ！ ウィンド！」

男がそう言うと風が突如吹き始めた。そして、その風は富治を襲う。刃となつた風は富治の肌を切り裂いていく。

「くそっ……」

空は剣を振り回した。すると、あたりの温度が上昇し始めた。
「これでもくらつてやがれ！ フレアバースト！」

剣の温度が上昇し小さな火を作り出した。そして、その小さな火たちを男に発射した。

だが、それを男は剣ですべて防いだ。そして、再度切りかかってきた。

「くつ」

「とじめだ！ ウィンドカッター！」

男は富治の切りかかった。その一撃で富治はその場に倒れてしまつた。

「富治！」

風紋と彩音が駆け寄る。彩音は術で富治の回復を始めた。

「きさま！」

風紋が術で男を攻撃する。しかし、それをあつさりとかわした。
「たいしたことがないな……。なぜ、その剣を持っているか疑いたくなる」

「なに！？ 宮治を馬鹿にするのか！」

「そう受け止めたならあえて否定しない。そいつの心配はしなくてもいいだろ。みねうちだ。それより、お前達はこの程度の実力の男を連れて西軍領域に向かうとこうのか？」

「そうだ！ 僕たちはこの戦争を止めるんだ！ どんな実力であろうが、戦争をとめるには西軍領域に行くしかないんだよ！」

「ふふ、その意気込みがいつまで続くかな」

そう言つとその男は宮治たちが向かうべく方向に姿を消していった。

それから何時間がたつたとき、宮治は目を覚ました。

「あ、気が付いた。風紋！ 宮治がおきたわよ」

「こりは？」

宮治は起き上がりながら彩音に聞いた。

「ガイアマウンテンの頂上よ」

「そうか。あの男はどうした？」

「西軍領域のほうに行つたよ。僕たちを馬鹿にした態度でね」

「そうか……。まさか、俺が負けるとは思いもしなかつたな……。

奴は強かつた

「ねえ、宮治。まさかこれで西軍の領域に行かないなんていわないよね？」

「ああ、俺は絶対に戦争をとめなきやいけないんだ。このまま引き下がる」とはしない

「だよね。良かつた、いつもの宮治で。とにかく、聞きたいことがあるんだけど」

「なんだ？」

「その剣 赤い剣はどこで手に入れたの？」

「ああ、これが。これはソードシティにいる老人に俺がもともと持つていた剣と交換したんだ」

「なんだ」

「それがどうかしたのか？」「

「いやね、あの男が言つたんだ『その剣を持っているか疑いたくな
る』って。もしかしたら、何か特別な剣なのかなあとか思つたから
さ」

「特別な剣か……。まさかね。あの老人がそんな特別な剣を簡単に
くれるとは思わない」

「ま、特に気にすることじやないってことね。さあ、それより早く
この山を降りましょう。そろそろ陽が落ちるわ」

富治は立ち上がり、三人は山を降り始めた。

オレンジ色に染まつたはっぱのアーチをくぐりながら……。

第07話 「謎」

「ここがガレアタウンか」
ガイアマウンテンを下りた富治たちは、ガイアマウンテンのふもとにある町ガレアタウンへとやってきた。

ガレアタウンはガイアマウンテンのように木々と家並みが同一化しており、とても綺麗な町だつた。

「さて、ここからどう行けばハイブリッド神殿にいけるんだ?」

富治はガレアタウンの入り口前で風紋に聞いた。

「ここからさらに西に行つたところにあるよ」

「よしじやあ早く行こうぜ」

「ちょっと待つてよ」

と、ここで彩音が言った。

「もう夜だし富治も疲れてるでしょ? 今日はこの町で休んでいきましようよ。それに、食料を買っておいたほうが良いし」

「そうだね。富治、この際休もうよ。たまには宿に泊まるのもいいと思うよ」

富治はそれに反対をしたが、一人に押し切られしぶしぶ宿に泊まることになった。

部屋は安価にするため、三人で一部屋になつた。それに対しても彩音は反対だったが、資金面の関係で結局そうなつたのだ。

部屋は質素な部屋だった。ほとんどの装飾品はなく、必要最低限のものしかなかつた。

「一個は私が使うわ」

「いや、じゃあ僕が後一つは使つね」

「おいおい、俺はどうなるんだよ!」

三人は室内で争い始めた。

部屋にあるベッドは一つしかなかつた。つまり、一人はベッドで寝ることはできなかつたのだ。そうなつたら、あと一人は地面に直

接寝るしかないがそれを誰にするかで争っているのだ。

いつまでたっても決まらないので彼らはジャンケンで決めることにした。すると、魔術師が勝ち剣士は負けてしまったのだった。

次の日。富治は背中が冷たいと感じながら畳をつぶつていた。それでもそうだけ。地面に直接寝ているのだから冷たいのは当たり前だ。

だが、よくよく考えると背中が冷たいのは変である。最初は冷たくても富治自身の体温によつて多少は暖かくなるはずである。

さすがにそこまで富治は考えなかつたが、ふと畳を開けてみた。

「！？ どこだここは！？」

畳を開けた視線の先。それは、昨日と違う天井であつた。それに気づいた富治が起き上るとそこは何もなかつた部屋よつさらに質素な部屋で、入り口は柵でぬけられないようになつていて。

「牢獄じゃねえか！」

富治は大声でそういった。すると、隣にいた彩音と風紋がおきだした。風紋はまだ少し寝ぼけている。

あたりを見回した彩音も風紋も一体なにがどうなつたかわからないという様子だった。

すると、こつこつと足音が聞こえ始めたと思つと、富治たちの牢獄の前に一人の男がやつてきた。どうやら見張りのようだ。

「うるせえぞお前ら！ もう少し黙つてやがれ！」

「黙つてられるか！ 僕らはいつの間にかにこんな薄汚いところに閉じ込められたんだぞ！」

「そんなことおれの知つたことか！ お前らは捕まえられたんだ。おとなしくしてな」

「くつ

「ねえねえ」

見張りと富治が言い争つている中で、彩音は冷静だつた。二人の口論が終わると、彩音はやさしく見張りにたずねた。

「「」の牢獄がある街はどこなの？」

「ああ、ウエストシティだ。つて、お前らがそんなことを知つても何の得にもならんがな。とりあえず、おとなしくしてな」

見張りはそう言つと、その場から去つていつてしまつた。

それを見届けてしまつた、三人は脱出を試みようと作戦会議を始めた。

「たくつ、こんな所に閉じ込めやがつて。一体誰がこんな所に……」「そんなことを言つてもしようがないよ。ここを出る作戦を考えよう」

「せうだな。で、どうするんだ？」

「「」の脱出に富治はいらないわ」

彩音は言つた。それを聞いた富治は少しそむつとしながら、「なんでだよ？」と言い返した。

「鞄の中を見てみなさいよ」

「あ！ 剣がない！」

「そういうこと。あなたは剣が使えなきやほんどなんにもできないでしょ？ だから富治はここでは役に立たないのよ」

「くそつ。あいつら俺の剣をもつて行きやがつたな」「ねえねえ、僕のウインドノヴァで壊せるかな？」

「ウインドノヴァで？ 確かにあのわざは強力だつたわね。でも、これが壊れるかしら？」

「そうだわ。私のサポート術を使ってウインドノヴァの威力を上げましょう。そしたら、壊れるかもしれないわ」

「そうだね。じゃあ、それで行こう。富治は少し下がつていでね」

富治はそういうわれ後ろに下がつた。そして、風紋は彩音のサポート術”プラスパワー”を受け、魔術の威力を高めた。

「今よ！」

「いけえ！ ウィンドノヴァ！」

彩音の掛け声にウィンドノヴァが一気に放たれた！

いつものウィンドノヴァよりもプラスパワーを受けただけ威力が上がつている！

柵にウインドノヴァが加わると、めきめきと柵が曲がり始めた。そして、ついに柵ははじけ、巨大な入り口が完成した。

それと同時に壊れた柵による巨大な音があたりにこだました。

「さあいそいでいくわよ！」

三人は牢獄を出て左手に進んでいった。さつきの見張りがそつちから出て行くところをみたからだ。

すると、後ろからどたどたという音が聞こえてきた。どうやら、右手には見張りがいたようだ。

「へへ、後ろの見張りじや俺たちには追いつかないぜー。」

「富治前！」

風紋がそういうと、富治は前を向いた。すると、そこにはさつきの見張りが剣を持って立ち構えていた。

「きさらま逃げ出すとはいひ度胸だ！」

「邪魔だ！ 賴んだ風紋！」

「うん！ ウィンドノヴァ！」

風紋は威力が元通りになつたウインドノヴァを放つた。それによつて、見張りはその場に倒れてしまつた。

「大丈夫、弱めてあるから死んではいないよ。さあ、早く行こう」ちょっと待つて。もうそう言つわけには行かないみたいよ」「え？」

富治と風紋が彩音を見るように後ろを振り向いた。すると、そこには五人ほどの武器を持った見張りが來ていた。

「逃げ出すとはいひ度胸だな。お前らはここで始末してやる」

「へん！ そんなことができるかな」

富治はそう言つと倒れている見張りから剣を奪い取り、身構えた。「行くぜー！」

富治はさつと一気に駆け出した。そして、相手に切りかかつた。

狭い通路での戦い。一対一が必然的になる戦いは富治に有利だつた。富治はなかなかの剣の実力を持っているのだ。彼に一対一でか

なうものはほとんどいない。

そうして、富治たちは無事に牢獄から逃げ出すことができるのでつた。

「やつと出れたあ！」

牢獄から出た富治は最初にやついた。牢獄から出た先は以外にも街の外だった。

どうやら、裏口から出てしまつたようだ。だが、それは彼らことつてはいいことであった。

「一体なんだつたのかしら？ あんなところに閉じ込められるなんて」

「俺たちが一体なにをしたつて言つんだ？」

「それはお前らがこいつらの領域に踏み込んだことに理由があるだろう

と、ここで富治でも風紋でも彩音でもない声が聞こえた。その声の主を探すと、そこにはガイアマウンテンの頂上で戦つた緑の剣の男が現れた。

それを見た富治は必然的に奪つた剣を鞘から抜き出した。

「何もお前らを戦つつもりはない」

男はそう言つと、赤い剣を富治に差し出した。

「これは俺の剣……。さてはお前が盗んだんだな！」

「盗んだものをこいつ簡単に差し出すとは思えんがな。まあ、なんともいいうがいい」

「ねえ、一体どうして僕たちは閉じ込められたの？」

「忠告しただろ？ こちらの領域に踏み込むとな。それはこいついう意味だ。西軍は東軍のものを人目で見抜く。お前らは簡単に見破られ西軍の連中にこいつに連れてこられたというわけだ。お前らは情けないといつわけだ」

男はそつ言つとその場を去つてこいつとした。富治はそれを見て男がいくのをとめた。

「待てよ。どうして、俺たちにそんなことを教える？ それに俺の

剣は一体どうしたんだ?」

「お前らには関係ないことだ」

男はそう言いつと、富治たちの問いかけにも足を止めずその場を去つていった。

第08話 「フレアの魔物」

誰の仕業かわからぬが、西軍の首都であるウエストタウンへと来てしまっていた富治たち。

牢獄から脱出したため、ウエストシティに戻ることはできなかつたため、南にある町”レフトタウン”によることとなつた。ガレアタウンで悲劇にあつたので、彼らは注意して食材などの買出しをした。

「さて、これからどうするか?」

買出しamburgが終わつたとき富治が言ひた。あたりはほとんど人気がなく暗くなつていた。

「どうするつてなにがさ?」

「今日の泊まりだよ。まだか宿に泊まるなんてことはできないんだからな」

「そんなことないわよ」

と、富治が言つたことに對して彩音は反論をした。

「宿に泊まる」とはできるわ。交代交代で見張りをつけておけばいいじゃない」

「よく戦場のテントでやるあれだね」

「そうそう。あれじゃよくわからぬいけど大体わかるわ。どう富治

?

「じゃあ、どうしようか」

彼らはレフトタウンにある宿屋に泊まつた。

またしてもジャンケンで負けてしまつた富治が最初に見張りをすることになり、その次に風紋、彩音と続いた。

そして、何事もなくその晩を過ぐしたのだった。

鶏が鳴きだした時間。彼らは昨日買った食材を使い朝食を取り、レフトタウンを後にした。それほど長居することはできないのだ。

レフトタウンを出発した彼らが向かつ先。それは、今度こそハイブリッド神殿である。

ハイブリッド神殿はガレアタウンの西方向にあるため、ガレアタウンを目指し歩いていた。ガレアタウンの姿を認めるに、彼らは方位磁石によつて方位を割り出し西へと向かつていくのだった。

「なあ、少し暑くないか？」

と、富治は言つた。

上空は曇り覆われ太陽の光などは差し込んでいない。あたりは砂漠であるが……。

「そうねえ。確かにさつきより少し暑くなつてきてかな」

一步一歩西へ西へと向かえば向かうほど暑くなる……。彼らは一休なにがあるのだろうかと思いながら歩いてた。

すると、彼らは巨大な岩山の姿を遠くに認めた。もしやと思い、その場へと近づいていった。

「ん？ 洞窟だ」

岩山に近づき認められたのは洞窟だった。洞窟の入り口の前まで

やつてくると、そこに雑な字で”フレアビッグバフ”と書かれていた。

「フレアビッグバフ？ つてことはここがハイブリッド神殿の入り口つてことか」

「そうみたいだね。にしても、フレアって言つてから暑いなあ。僕は暑いのは嫌いだよ」

「そんなことを言わないの。がまんして奥に行きましょう」

彩音のその言葉に促され風紋はいやいやとフレアビッグバフに入つていつた。その時すでに富治は洞窟内に入つていた。

フレアビッグバフ、フレアと呼ばれるだけあり暑くあたりの岩の色が準赤色だった。岩も熱をおび、触るとやけどがしそうなほどだつた。

そんな暑さの中、ひたすらに奥に進んでいた三人。そんな時に急激に暑くなり始めたのに気づいた風紋は言つた。

「ねえ？ 何か暑すぎない？」

「確かに。一体どうなつてるんだ？」

「奥にいけばいくほど暑くなるのは当たり前だと思つんだけど」「でも、奥はハイブリッド神殿につながる出口だぜ？ そんな暑くなるわけないじゃないか」

「じゃあ、道でも間違えたのかしら？」

「分かれ道はなかつたから間違えるわけはないよ」

「一体どうなつてるんだ？」

不思議に思いながら彼らは奥へと進んでいった。そんなときだつた。彼らの前に現れたのは巨大な部屋にたどり着いた。

「ここは？」

富治がそう思つた瞬間だつた。突然地面が揺れ始めたのだ！

「な、なんだ！？」

「富治下よ！」

揺れがどんどん強くなりだしたと思うと突然、真ん中の地に巨大な穴ができ始めたではないか！

そして、その穴から巨大な赤い生物が現れた！

「な、なんだあれ！？」

「もしかしてハイブリッド神殿を守つてる生物なんじや！？」

「だつたら、倒すしかないようね。さあ行きましょう！」

彩音はそう言つと、プラスパワーを使い一人の力をパワーアップさせた。

それを受けた富治は、剣を抜き巨大生物に切り込みを入れた。一方の風紋もウインドノヴァで攻撃をする！

だが、巨大生物はそれらをもうともせず上空から巨大な岩を落としてきた。

「チツ！」

富治はそれらをうまくかわし、彩音のところまで下がってきてしまつた。

「あの岩が邪魔をしてくるな。ここは遠距離攻撃だ！ くらいな！」

フレアバースト！

富治は小さな炎を作り出し発射したが、相手自体が燃えていることからそれをうけてもなんともなっていなかつた。

「ここは僕に任せて！ アクアクリスター！」

風紋は巨大な水を作りだし、それを発射した。それも連発だ！ それらを受けた巨大生物は煙を放ち始めた。どうやら、蒸発してしまつているようだ。

だが、巨大生物もそれだけではやられない！ 蒸発している中で炎を噴出して富治たちを襲う！

「バリア！」

飛んできた炎を彩音はバリアを使い受け止めた。しかし、巨大な威力の炎はそれをも押し切らんというばかりだ！

「クツならば！」

と、富治は彩音が張られていないバリアを抜け出し、巨大生物に攻撃をしに向かつた。

「くらえ！」

「富治！ こうなれば僕も！」

富治は巨大生物に切りかかつた。それを見た風紋もバリアから抜けだし、アクアクリスターを発射した。

すると、巨大生物は炎を放つのをやめた。それと同時に彩音のバリアがはじけた。

「大丈夫かい彩音？」

アクアクリスターを放つた風紋がバリアがはじけ座り込んだ彩音に近寄り言った。

「ええ、それより富治を」

富治はその剣で巨大生物を切り続けていた。だが、生物の間には穴があるため剣本来のダメージを与えることができなかつた。

「いけえ！ エレキブースト！」

風紋は巨大な電撃を放つた！ それは巨大生物をしびらせるほど の威力だ！

「富治！」

「サンキュー！俺の必殺わざをくらえ！ブレイクリッパー！」
富治は穴をジャンプし飛び越えた。そして、富治自身の一一番強いわざ。切れ味抜群の剣で攻撃をした！

すると、巨大生物の腹部にきれつができた。きれつができるとどんどんとそれが大きくなり最終的には真っ二つとなってしまった。だが、巨大生物を倒したまではよかつた。しかし、穴の中に富治は落ちていく運命にあつたのだった……。

「富治！」

「おどけせはしないわ！ フィールドエリアー！」

風が吹き抜ける谷。それらは彼らを祝福してくれるようにせりぞく包み込んだ。

「ふう、あぶないところだつたけど、何とかなつたな」

「もう！ ちゃんと後を考えてよね」

「悪い悪い。しかしそごいなあのわざ。突然地面がしかれるんだもんな」

「普段はあまり利用価値がないわざなんだけね」

「それにしてもここすごいね。風も綺麗だしさ」

「と、ここで風紋が言つた。

「そうだな。それで、あの奥にあるあの建物がハイブリッド神殿かフレアどうくつを出た先にあつた谷。その谷の奥に見える古そな建物。それこそがハイブリッド神殿。ついにハイブリッド神殿に彼らはやつってきたのだった。

第09話 「ハイブリッド神殿」

ハイブリッド神殿。かつての戦争を終結するために旅に出た三人の者達が使った伝説の剣 フレイムブレード、ウイングブレード、ウォーターブレードが、この神殿には収められていた。

三本の剣はそれぞれの所持者が共同で守り続けた。それらの一家は三本の剣を守ることを使命としていた。

だが、その使命は突然破られた。

悪の心を持つものが神殿に現れた。そいつは一人であつたが、その巨大な力を使い三本の剣を盗み出そうとした。いや、盗んだのだ。守っていたもののほとんどはそいつに殺され生き残ったものはハイブリッド神殿には戻らなかつたという。

そして、今現在、生き残つたものの消息は不明。一体、どこでなにをしているかどうかを知つてゐるものはいなかつたのだった。

そんな中、三本の剣の一本 ウォーターブレードのみがハイブリッド神殿にまもなく戻つてきた。誰が戻したかはわからなかつた。しかし、残りの二本はいまだに戻つてこないのだった……。

「さて、じゃあ今日はここで休むことにしましょうか」

フレアどうくつを抜け、ハイブリッド神殿の姿を認めた宮治たち。彼らはフレアどうくつの前にまだ立つていたのだった。

そもそものはずだ。姿を認めることはできても、空をオレンジ色に染まり、今にでも暗闇になろうとしているのだから。

ハイブリッド神殿はどうくつか遠く、行くための道もがけと隣り合わせの状況であるため、暗闇の中で神殿に向かうというのは自殺行為なのだ。

その自殺行為について当初は宮治はあまり理解していなかつた。だが、風紋と彩音に言われ、二対一では勝てないとふんだのか二人に同意したのだった。

でも、後々考えたところでは一人に同意してよかつたつと胸をなでおろすのだった。

「しかしあの怪物はやばかつたな」

と、食事の後富治は話を切り出した。

「まさかあんな巨大な怪物がここを守っているなんて思いもしないもんなあ」

「そうだよね。フレアひとつ奥を守つていてわかれれば、たく

さん的人が押しかけてきそうなものなのに」

「確かに気が強い人ならそうだけど、気の弱い人だったら絶対にこ

こにはもう来ないでしょうね」

「気が強い人か……。俺らはそれに部類されるのかな？」

「たぶんされるんでしきうね。おそらく、神殿の中にはまだ私たち

を阻む存在がいるでしきうね」

「また、あんな怪物が出てくるのかな？ それだつたらいやだな…

…。もう、あんな怪物を見たくないよ」

「風紋の術があれば怪物が出てきても大丈夫さ」

「そういう問題じやないのに……」

「風紋は見ること自体がいやなのよね？」

「うん。彩音もそうでしょ？」

「まあ、ええ」

「とりあえず、あんなのが出てきたら頼んだぜ、風紋」

「ええ！ なんで僕が……」

翌日。彼らはハイブリッド神殿に向かった。危険な道を通つて…。

フレアどうくつ出口から出発して何十分とたつたころ、彼らはハイブリッド神殿の前にやつってきた。

「ここからか……」

富治はつぶやいた。

彼らはハイブリッド神殿の中へと入つていった。そう、この戦争

を終結させるために安置されているという剣を手に入れるために。戦争を終結させるために。

ハイブリッド神殿の中はひんやりとしており、真っ暗だった。あたりは遺跡のような雰囲気をかもし出していた。

入り口からいける道は複数あり、どの道をとおれば伝説の剣がある道をとおれるかはわからなかつた。彼らはとりあえずまつすぐの道を進んでいった。

奥を進むと、骨だけの怪物や空を飛びこなすものが大きくなつたような怪物が、三人の前に立ちはだかつた。だが、そんな怪物も富治と風紋の攻撃にはかなわなかつた。三人は一気に億へと進んでいた。

だが、また一手に通路は分かれ、今度は右の通路へと入り込んだ。だが、その通路の奥は行き止まりだつた。

そのため、彼らは戻り、左の通路へと入つた。すると、また右と左の通路が出てきて、今度は左の道へと向かつた。すると、そこはまた行き止まりだつた。

「ああもう！」

それから何回もさまよい、最終的に入り口まで戻つてきて富治は大声を出していった。

「大声出さないでよ富治！」

富治の大声は周囲を囲まれている神殿の中に響き渡つた。

「だつてもう何時間もこんなところをさまよつてるんだぜ？　いい加減イラつくぜ」

「後一つの通路だけなんだから我慢してよ。この右通路だよ」

神殿に富治たちが入つてから、もう何時間もたつたこと。彼らは入り口にある三つの通路のうち正面と左の通路をすでにさまよつついには入り口に戻つてきたのだった。

よつて、目的地は右の道にあるのだ。それが何時間もたつて彼らは知つた。

右通路を三人は進んでいった。すると、正面の通路や左の通路とは明らかに怪物が違っていた。いや、怪物 자체は同じだった。だが、力が違うのだ！ 富治たちが同じ攻撃をしても同じ手数では倒れないのだ。そして、攻撃してきたときのパワーも違っていた。

「くそつ！ 何でこんな急に強くなるんだ！」

「ウインドノヴァ！」

富治の後ろから迫ってきた骨だけの怪物に風紋はウインドノヴァで攻撃した。怪物はその一撃を受け、その場に倒れこみ跡形もなく消え去ってしまった。

「ふう、大丈夫富治？ もつと氣をつけなきゃダメだよ」

「わかつてるつて。急に強くなるもんだからさ」

「もう！ そういうてごまかすんだから。さあ、早く行きましょう。こんなところでとまっていたらいつ襲われるかわかりやしない」
パワーアップした怪物たち。それが物語っているものは、この奥に伝説の剣があること。それは三人とも承知していた。三人は強力な怪物たちに立ち向かいながら奥へと進んだ。

そして、三人は奥に何か部屋があるのを認めた。

「あそこににあるんじやないか？」

「ええ。その可能性は十分あるわね。まあ、急いだつてどうしようもないからゆっくりいきましょつ。何かわなが仕掛けられているかもしけないから」

彩音はおだやかにいった。だが、内心はとてもドキドキしていた。ついに戦争を終結させられる剣を手に入れることができるのだから。その部屋は天井は高く奥行きもなかなかあり、横幅も広かつた。奥のほうに何やら小さな別の部屋に通じると思われる通路がある。だが、その部屋の前には富治たちを驚かすものがあった。

「来たか……」

「お前は！ なんでこんなところにいやがる！」

富治は剣を抜いた。そして、緑の剣を持っているその男に「攻撃するぞ」といわんばかりに剣を構えた。

「私は伝説の剣を手に入れるためにただだけのことだ」

「それは俺らが先だ！」

「後から来たお前達に言われたくないな」

「なんだと！？ 第一、お前みたいな奴に使わせるわけにはいかないんだよ！ 伝説の剣をな！」

「ならば、力ずくで手に入れるがいい」

男はそう言うと緑の剣を構えた。

「後ろの一人も加わるといい。お前一人では相手にならんからな」

「なんだと！？ あのときの俺と一緒にするんじゃない！」

富治はそう言つと男に接近した。それと同時に風紋と彩音も動き出すのだった。

第10話 「正体」

「くらいいな！ ブレイクリッパー！」

「ふん！」

富治はブレイクリッパーで男に攻撃を仕掛けた。だが、男は自分の剣でその攻撃から身を守った。

「あまい！」

男は富治の攻撃を押し切り攻撃をやめさせた。

「ウインド！」

「フレアバースト！」

「アクアクリスター！」

男はウインドで攻撃を仕掛けてきた。だが、富治のフレアバーストによつて、二つのわざはぶつかり合つ。ぶつかり合う中、風紋のアクアクリスターが発射されフレアバーストを援護した。

それによつて、ウインドは打ち消されフレアバーストとアクアクリスターが男を襲つた。

「もう一発くらえ！」

「ファイヤーバースト！」

富治のフレアバーストに、風紋の新技”ファイヤーバースト”が放たれた。ファイヤーバーストは大きな炎の玉が発射されるというシンプルなわざだ。

フレアバーストにファイヤーバーストが加わり、個々のフレアバーストの火力が上がりファイヤーバースト自体という二つの強力な攻撃が男に向かつて行く！

その攻撃を男は受けた。衣服はどんどん焼けていく　かと思われた。だが実際は違つた。

最初、富治たちは男が炎で焼ききられていたと思っていた。だが、三人の前に現れたその男は熱そうにしている様子などなく、逆に水にぬれていた。

「ぬるいな」

「なー? 一体どうして……! ?」

「私をなめるな。その程度の攻撃で私が倒せると思つたら大間違いだ!」

男はそう言つと、今度は富治たちに いや、 富治に接近してきた!

「くつ!」

富治は男の攻撃があまりにもすばやいため、攻撃を防ぐぐらいしかすることができなかつた。男は特殊な攻撃ではなく、単調な切りかかる攻撃を仕掛けてきた。

「ほう、この攻撃を止めるなんてな」

「俺をなめるな!」

富治は男を押し切り、切りかかつた その時わずかながら剣が光つた が、男は簡単に防ぎ富治の剣を吹き飛ばした。

「ウインドノヴァ!」

男は富治に切りかからうとしたが、風紋のウインドノヴァによつてそれがさえぎられた。

「富治! これ!」

男が一、二歩下がつた時、飛ばされた富治の剣を彩音が投げて渡した。

「彩音、サンキュー!」

富治はそれを受け取り、男に向かつてフレアバーストを放つた。男は突然、水を体にまとい始め、フレアバーストを防いだ。

「なー?」

「まさか、その程度の攻撃にこれを使う破目になるとは思いもしなかつたな。まさか、お前の攻撃がそこまでクイックだとは思いもしなかつたぞ」

「これだけじゃないぜ!」

そう言つと富治の剣がさらに赤く燃え始めた。

「いけえ! フレイムブースト!」

剣の色が完全に真つ赤になつた時、富治は剣を振つた。すると、巨大な火の玉が無数、男へと飛んでゆく！

「アクアリング！」

男は体に水をまとい始めた。どうやら、先ほどからこのわざを使つていたようだ。

フレイムブーストは男に全部直撃した。

「どうだ！ 僕が取得したこのフレイムブーストは…」

「一体そんなわざをいつそんなわざを……？」

「ん？ ああ、そういえばどうしてこんなわざ取得したんだ？」

「は？」

そういうたのは彩音だった。どうやら、その言葉に呆気にとられたようだ。

「いや『は？』とか言われても困るんだけど。よくよく考えるとなんで俺がこんなすごいわざを使えたんだ？」

「それはお前の剣の能力だ」

富治の後ろから声が聞こえた。富治が前を向くとそこには男が立っていた。だが、所々の衣服が焼けて破れている。

「あの攻撃を受けて……！」

「アクアリングを押し切つた奴は久しぶりだ」

「ならばもう一発打つてやるぜ」

富治は先ほどのように剣を真つ赤にさせることを試みた。しかし、先ほどのように剣は真つ赤に燃えなかつた。

「あれ？ なんで？」

「お前がその剣を使いこなしていないからだ」と、男が言った。

「なんだと？」

「お前は知らないのか？ その剣が伝説の剣の一本であることを」

しばらく沈黙が続いた。

「ええ！ この剣が伝説の剣の一本！？」

「そうだ。お前が使つた先ほどのわざ。あれは、炎の剣が持つ能力。

そして、これが伝説の剣の一本”緑の剣”的能力だ！」

男はそう言つとまるでトルネードがおき始めた。そして、そのトルネードが富治たちを襲つた。

「お前！」

「アクアクリスター！」

風紋はアクアクリスターを発射した。だが、男は個々のアクアクリスターを剣で切り落とした。

「私はお前達と争つつもりはない」

と、男は言つた。そして、さらに言葉を続けた。

「私はお前達と同じ目的を持つた者だ」

「お前が？」

「そうだ。お前達もこの戦争を終結させたいのだろ？？」

「そうだけど、一体それをどうして……」

「伝説の剣を手に入れようとしている者は戦争を終結させようもの以外はないのだ。強力な剣だがこれで世界征服などをすることはできないのだからな」

「なぜだ？」

「戦争を終結させた剣だ。いわば正義の剣。そのようなもので悪用することなどできないだろう。どうだ？ 戦争を終結させようとしているもの同士、手を組まないか？」

「……。いいだらう。お前のその言葉信じてやる」

「ちょっと富治！ あんな奴の言葉を信じるの！？」

「どっちにしろ、伝説の剣の一本はあいつが持つているんだ。だから、あいつに協力してもらつたほうがいいだろ？ それに剣を操るたつて、俺は三刀流なんて無理だぜ」

「でも……」

「大丈夫だよ」

と、ここで風紋は言つた。

「富治とあいつを信じようよ、彩音」

「風紋まで……。もうー、勝手にしなさい」

彩音は外方を向いた。

「よろしくな。ええつと……」

「私は宮本剣次という」

「俺は川原富治っていうんだ。よろしくな、剣次！」

四人は自己紹介をした。

そして、三人に新たな仲間が増えたのだった。

第11話 「最後の剣」

「そりや！」

ハイブリッド神殿の外。太陽の光がてんてんと照っている。その下で富治は、右手に赤い剣を持ち左手に青い剣を持ち、剣次に向かって攻撃をしていた。

剣次は富治にたいして緑の剣を使い、一つの剣による攻撃を防いだ。

「まだまだ脇が甘いな」

攻撃を防いだ剣次は言った。

「そんなこといたつてよ、俺だって二刀流は初めてなんだよ」

時はさかのぼり一日前。

四人は自己紹介をした後、剣次は言った。

「ところで、川原以外で剣を使える奴はいるのか？」

「え？ 僕は使えないけど」

「私も。剣を持ったことさえないわ」

「それがどうしたつていうんだよ？」

「この奥に入るといい」

と、剣次はそう言つたとある箇所の壁を押した。すると、そこには通路ができたではないか！

剣次は三人を招き、その通路を通つていった。すると、小部屋が現れた。そこには一本の青い剣が安置されていた。

「これは……？」

「これこそ伝説の剣の一本である、青の剣。ここに、赤、緑、青の剣がそろつたわけだ」

「本当か！ やつたぜ！ これで三本そろつた！」

富治が声を張り上げていった。部屋中にその声が響いた。

「つるさいな……。そんなに喜んでいる暇などないぞ」

「んな訳あるか」

「では聞くが、その青の剣は誰が使うのか？」

「は？」

「『は？』ではない。私は緑の剣。お前は赤の剣。そしたら、青の剣は誰が使うのだ？」

「まだ、風紋と彩音がいるだろ。どちらかが使えばいいじゃないか」「私は無理。剣なんて持つたことさえないわ。それに剣を使えるほどの実力もないわ」

「僕も剣はちょっと……。肉弾戦はダメなんだ」

「おいおい、そしたらこいつはどうなるんだよ？」

「だから言つてるのだ。その剣は誰が使うのだとな」

「うーん。じゃあ、こいつは誰が使うか……」

部屋は静寂に包まれた。数十秒たつと、剣次は言った。

「私に一つ案がないわけでもないのだが……」

「案？ どんなのだよ。何も考えられないからその案を聞くよ」

「お前は二刀流はできるか？」

急に質問されたので富治は少し言葉の処理をするのに数秒使ってしまった。だが、処理が完了すると言った。

「そうか！ 二刀流だつたら使えるな。でも、残念ながら俺は二刀流なんてできないぜ。今まで少しだけやつたことはあるけどな」「ならば頼む。私は二刀流などするつもりはない。風紋と彩音も剣より魔法の方が使えるだろう」

「ちょっと待て！ なんで俺が二刀流なんだよ？ 剣次も剣士ならああだこうだ言わずにやればいいじゃないか」

「私は一度も二刀流をやつたことがない。さらに魔法を使う時もある。一刀もつと邪魔になるのでな。その分、経験もあり魔法も使わない富治ならば都合がいいのだ」

「でも……一刀流なんて自信ないぜ？」

「大丈夫だ。その辺については私が指導してやるわ」

こんな経過で富治は「一刀使つことになり、今現在、いつして剣次と共に「一刀流の練習をしていた。

だが、少しばかりの経験で昔に一刀使つていた富治にとってはとても難しいことだった。両手に剣。これほどやりにくくはないだろう。

しかも、使つてゐる剣は”伝説の剣”と呼ばれたものだ。それだけ扱いも難しい作りで、剣本来の力を一気に一つ引き出すことは難しいのだ。

来る日も来る日も富治は練習を続けた。剣次もそれに付き合つた。しばらくの間、ハイブリッド神殿の近くで寝泊りすることに決まつていたので、彩音は魔法”ワープ”を使い、風紋と共に食料の買出しや戦争の状況などを探つていた。

そんなある日。神殿の中で練習をしていた富治と剣次。神殿内の敵は剣次にとつてはたいした敵ではなかつたが、二刀流にして間もない富治にとつてとても大変だった。

そんな中。行き止まりへと来た一人。そこは他の行き止まりとは違ひ何かしらの雰囲気が違つていた。

「ここだけつくりが悪いのかな？」

「それもありうるが……。何かしらありそうだな」

剣次はそう言つと、壁をたたき始めた。

「なにしてゐるんだ？」

「壁の奥に空洞があるかどうかを調べてゐるのだ。こいつあることによつて、隠し通路などを探し出すことができる」

剣次はトントントントンと壁を地道に一箇所ずつたたいていく。富治も逆側から同じことをし始めた。

すると、トントンとこつ音ではなく別の音に変わつた場所が一箇所発見した。

「おい、剣次。ここだけ音が違つぞ」

「でかした。ちょっと、下がつていろ」

剣次は富治を一步分後ろに下がらせた。すると、緑の剣が光りだしさらに強い緑色が剣を覆う。そして、その剣で剣次は壁に切りかつた。

すると、壁は大きな音を上げほこりがまつた。ほこりがなくなると、二人の前に予想通り一つの通路ができるていた。

「通路ができる……」

「剣の安置部屋以外にも隠し通路があるとは知らなかつたな。行くぞ」

二人は通路を通りていった。

通路を通り過ぎ、そこに現れたのは小さな部屋。青の剣が安置されていたあの部屋と同じ広さである。

そして、剣が置いてあつた場所には、一冊の本が置かれていた。古びて紙の色が完全に変色してしまつてゐる。剣次はその本をとりページをめくつた。

それにはこうかかれていた。

『炎。水。風の剣を使いこなすものの戦争を終結させる力を得るなり。また、戦争を勃発させる力を得るなり。所持者の考えによりどちらを選ぶかは決めることを許す』

「どうやら、三本の剣が集まるどどうなるかを記した本のようだ」

剣次は一息つき、続けていつた。

「そして、赤の剣は炎の剣。青の剣は水の剣。緑の剣は風の剣であることがこれで立証された。これでもう、この剣に関することは何もないだろうな」

「どういうことだ？」

「私はすでに三本の剣に関する情報をすべて知つてゐるというのだ。かつての所持者。この剣が特別な能力を持ったことについてなどだな」

「ぜひとも、俺に聞かせてくれよ」

「いずれかな。今はそれどころではなかろう」

剣次はそう言つと本をそこにおいて部屋を出て行つた。富治もそ

の後を追つた。

外に出ると二人は、また、練習を再開したのだった。

第12話 「決意」

富治が二刀流になつてから、一ヶ月がたつた。

一ヶ月間、毎日毎日練習を続けた富治だったが、当初よりいかは上達しているもののまだまだの実力になつていた。それに、赤の剣の力の解放をコントロールすることはできるようになつたのだが、青の剣の力の解放はまだできないのだった。

そんなある日。いつものように情報収集と食料調達から帰つてきた、風紋と彩音が衝撃のニュースを持ってきた。

「大変よ一人とも！」

彩音は大声で言った。その声を聞いた富治と剣次は練習をやめ彩音にどうしたか尋ねた。

「戦争が……戦争が決着を迎えるわ！」

「どういふことだ？」

その言葉を聞いた剣次は冷静に聞き返した。それに対して富治は心が動搖しているようだ。

「東軍が西軍領域に踏み込むつていうらしいの！ あくまで噂なんだけど、これが本当のことだつたら大変よ。二つの軍がついに正面からぶつかり合うんですから…」

「おいおい、じゃあ、俺たちも行かないダメつてことか……」

「仕方あるまい。その戦いを抑えるべく、ガイアマウンテンへと急ぐことにしよう」

「なんでガイアマウンテンにいくの？」

風紋が訊いた。

「東軍が西軍に攻め込むならば、ガイアマウンテンを通らねばならない。西軍は相手が大体攻め込むことがわかっているのなら、ガイアマウンテンで見張つているだろう。つまり、両者はガイアマウンテンでぶつかり合うのだ」

「なるほど。でも、大丈夫かな……俺はまだ青の剣の力を最大限に

引き出せないし」「刀流だつて……」

「大丈夫だ。まだまだ未熟なのは認めるが、お前なら何とかなるだろ？ところで、その攻め込むというのはいつなんだ？」

「わからないわ。でも、三日の間に攻め込むとかって言う話しこれも本当かどうかはわからないわ」

「わかった。ならば私が直接情報収集へと向かうことにしよう。悪いが彩音。私をレフトタウンへとワープさせてくれ」

彩音は言われたとおりに剣次をレフトタウンへとワープさせた。剣次はワープ際に「半日ほど帰つてこない」と言い残しながら。レフトタウンというのは、ガレアタウンとウエストシティにある小さな町である。三人も一度だけ行つたことはあるが本当に小さな町だ。

それから三人は心が落ち着かなかつた。いつ東軍と西軍がぶつかり合い、たくさんの人々が死んでいくのかと思うと……。

剣次が戻つてくると、情報収集の結果を三人に教えた。

「どうやら、決着がつくのは明後日のようだ」

「明後日だつて？」

「ああ」

「じゃあ、僕たちものんびりしているひまはないんだね」

「そう言つことになる。とりあえず、今日は陽が落ち始める。明日、調整をする」として今日は練習を続けることとした。「ひみつ」

翌日の夜。その日の夕食は彩音がもつとも得意とする料理のカレーライスだった。「明日は決戦の日だから」という理由で作ったのだが、富治にはよく意味がわからなかつた。

「ついに明日だね」

夕食後に火を囲んでいる他の三人に風紋は言った

「ああ、そうだな。俺らの旅もこれで終わるんだ。明日ですべての決着がつく

「なぜ」

と、ここで剣次が割り込んできた。

「なぜ、お前達は戦争を終結させようとしているのだ？」

剣次が前々から思つていた質問をぶつけた。すると、三人は一人ずつその質問に答えていった。

自分の母が殺されたこと。両親が肩身の重い生活をしていること。愛すべきものが死ぬ前に戦争を終結させるため。自分の故郷が壊されないため……。

「そうか」

すべての話を聞き終わつた剣次はもう一言言った。

「剣次はどうして戦争を終結させようと？」

「私には理由などない。戦争とは醜いもの。醜いものは排除すべきだろう。そう考えただけだ」

「でも、そんな理由で命をかけることはしないと思うよ」

「私の命などたいしたものではない。人一人の命に引き換えて何百人の命が助けられるならよからう」

「でも、そうとは限らないでしょ？　あなた自身の命が無駄になくなる場合もあるのよ」

「わかつてゐる。だが、私は旅に出たのだ。この戦争を終結させるという旅に。伝説の剣を求めて。さあ、もう今日は休もう。旅の終結は明日なのだからな」

翌日。あたりが少し明るくなつてきた時、富治はすでに起きて練習をしていた。

まだ、二刀流を完璧にマスターしたといえない富治はあせりを感じていたのだ。いまさらあせつてもしょうがない。そう思つていなければ、やはりやるべきことをやつておべきだと思つたのだ。

「早いんだね」

富治に話しかけてきた。後ろを振り向くとそこには風紋が立つていた。

「ああ、まだまだだからな。最後まで練習しておかなければ。それより風紋も早いな？」

「うん。なんだか、おきちゃって。いつもならもつと寝てるんだけど……。やっぱり緊張してるのかな」

「無理もないさ。戦争を終結させる田^たが来たんだから。それに俺たち自身の身が危険もあるのだから」

「そうだね。……ねえ、富治。戦争が終わったらどうするつもりなの？」

「ライトタウンに戻るよ。町はぼろぼろだし、復興しないといけないからな。俺が育った町を捨てるわけには行かない。それに母さんにも会わないといけないし」

「そう……」

「そういう風紋はどうするつもりなんだ？ やっぱり、両親のところに戻るのか？」

「うん。待たせているから。今日の戦いがんばり、富治。僕たちの戻るべきところに戻るために」

「ああ、がんばらうぜ！」

寝床に戻ると彩音と剣次はおきていた。彩音は朝食の準備をしている。

朝食を済ませ、一時間ほど時間を置いてから四人は一箇所に円を作りました。

「つこにいくんだな、ガイアマウンテンに」

富治が言った。

「ええ、絶対、この戦争を終結させるわ

「目的を達成するために。故郷に帰るために」

「そして、たくさんのものの命を救う」

「行こう！ ガイアマウンテンに！」

四人は彩音の”ワープ”でガイアマウンテンへと移動したのだった。

ガイアマウンテンは静寂に包まれていた。一風も通っていない。
まるで何かを察しているように。

富治たちがワープしてきたのはガイアマウンテン頂上付近の林の中だった。あたりは木々で覆われており誰かに見つかる心配はない。

「あそこに誰かいるよ」

風紋は頂上を指差した。木々の隙間から見えるその姿は、鎧をまといあたりを監視している。

「あれは西軍兵士だな。東軍がいつ攻め込むかがわからないからあそこから監視しているのだろ？ あそこだったら、あたりを見まわせるからな」

「でも、一人とは無用心だな」

「ここから見えるのは一人だけだが他のところではもつといれるのだろ？」

「ところどころあるの？」

「戦争をとめるといつても三本の剣の力を完全に引き出すだけではダメだ。三本の剣が出る聖なる光を両軍の首領に同時に当てなればならない。

だが、わかるだろうがそれは難しいことだ。両軍の首領が同時に戦場に出てくることなどありはしないのだからな」

「じゃあどうすれば？」

「まだ、時間はあるようだ。西軍首領に直接会つてみることじょうう。会う方法などは私に任せるといい」

富治たちは頂上へ上り、監視兵に「東軍の情報を仕入れてきた。西軍首領様に会わせてくれ」といった。すると、監視兵は疑いながらも西軍首領のところまで連れて行ってくれた。

向かっている途中、監視兵はいろいろと質問をしてきたが、剣次はいつも不利にならない回答を返し続けた。

「なんのようだ？」

左右にボディーガードをつけながら西軍の首領は、富治たちを連れてきた監視兵に訊いた。監視兵は剣次が言ったことを繰り返した。

「ふむ、どんな情報だ？」

今度は富治たちに向かつて訊いた。

「実は、東軍首領のラフラから和解したいと申されました」

西軍首領は眉を上げた。

「つきましては、西軍首領のガレフ様の承諾を得ればと思い……」

「お前、本氣で言つているのか？」

剣次が話している途中で西軍首領のガレフは言った。

「本氣でいざいます」

「そんな馬鹿な話しがあるか。そもそも、お前達がここに来た理由と食い違つていて」

「和解の話しへここに来ましたらお断りになられると思つたから嘘をついたのでいざいます」

「ふむ、なかなか頭の切れる奴だな。だが、お前達はここで消えてもらひうことにしよう」

ガレフがそう言つとあたりの兵士達が剣や槍を四人に向けてきた。四人は包囲されてしまつたのだ。

「仕方ないな……」

剣次はつぶやくと緑の剣を取り出した。それを見た富治も赤の剣と青の剣を取り出した。風紋と彩音も構えた。

「私たちはここで消えるわけには行かないのです。消えてもううー。」

剣次はそう言つと剣を構えている兵士達に切りかかつていつた。

そして、富治たちも。

突然の動きだったのであたりの兵士が一人ずつ倒れてからいつせいに動き出した。だが、彩音を除く三人は兵士をどんどんとなぎ倒していくた。

「なにをしている！ とつととやらんか！」

ガレフが大声で言つ。兵士達は意氣込むが三人の攻撃に歯が立た

どんどんと倒されていく。

「私たちは」

剣次は兵士を倒しながら、つぶやいた。その声はガレフにも聞こえていた。

「この戦争を終結させてやる。無駄な抵抗はやめるんだな」剣次の剣が緑色に染まっていく。すると、あたりの木々がざわざわとなりだした。

「彩音！ バリアだ！」

富治と風紋は彩音の近くによつていく。そして、バリアの中に納まつた。それと同時にあたりには竜巻ができ始めた。木々は今にも折れそうだ。

「スパイアルトルネード！」

人は竜巻に飲み込まれ、物はあたりへと吹き飛ばされた。富治たちもそれに襲われたが、バリアのおかげでそれを防ぐことができた。木々のざわめきがやむとあたりにはほとんど何もなくなつていた。あるものは風に吹き飛ばされた物ばかりで、ある場所は少し遠い場所だ。

「おいおい」

彩音のバリアを解くと富治は言った。

「なにもここまでしなくていいだりうよ」

「面倒なものに体力を使うべきではない。お前達もよくバリアを張つたな。それにより、頂上へと向かうぞ。ここにいたのが西軍兵士のすべてではないのだ。奴らを全員なぞ倒さねばならん」

「どういうことだ？」

「両軍の首領同士がぶつかり合つ時は兵士たちの数が少なくなつた時だ。その状況にするには兵士達をどんどんと倒していくかねばならない」

「じゃあ、まだ東軍の兵士も倒さなきゃ」

「そうだ。だが、まずは西軍兵士を倒す。行くぞ」

剣次は走り出した。三人もそれに負けじと頂上へと向かう。

四人が着いた時の頂上は悲惨なものだつた。あたりには切り倒されている人物がたくさん倒れている。

そう、もう頂上では東軍と西軍はぶつかり合つていたのだ！ 戦いはすでに始まっている。

「なんてことだ。一足遅かつたか……」

「ど、どうするの？」

「こうなればまとめて相手にするしかあるまい。ここははまとまって行動するぞ」

「わかった。行こう！」

富治たちは戦いの中に紛れ込んでいった。

「フレアバースト！」

「ウインドノヴァ！」

「ホーリーバースト！」

「ウインドカッター！」

富治はフレアバーストで、風紋はウインドノヴァで、彩音は光つている玉を乱射するホーリーバーストで、剣次はウインドカッターで攻撃を開始した。

それらの攻撃により人々は倒れていくが、数は減る様子がない。実際には減っているが彼らの目では減っていないのだ。

よそ者が攻撃してきていることがわかり、手が余っている者は富治たちに攻撃を仕掛け始めた。

だが、攻め込んできたものには富治と剣次の剣で攻撃し、攻め込まれていない時は魔法を使いながら攻撃をしていた。

順調に攻撃を仕掛けていた。だが、その順調さも急にかけてしまつた。

「おのれ。邪魔ばかりしやがつて。これでもくらうがいい」
様子を見ていた西軍首領のガレフは怒っていた。

我が軍の攻撃が妨げられているのだ、当たり前だろう。このことを知つたら東軍首領も怒るだろう。

怒りに心が支配されかけているガレフ。

「サンダー・ボルト！」

ガレフは巨大な電撃を作り出し、それを富治たちに放った！

「ん？ あぶない！」

頭上から電撃が降りてくることを確認したのは剣次だつた。剣次は声を出し、その場から去ることを「あぶない」にこめた。だが、それは風紋には届かなかつた。魔法を使うために呪文を唱えていたのだ。唱えている時は集中しなければならない。

「風紋！ あぶない！」

その様子を見ていた富治は風紋に向かつて走りだし、突き飛ばし

た。突き飛ばされた風紋は呪文を中断された。

「み、富治！？」

サンダー・ボルトが墜落した。

第14話 「力の解放」

「富治！」

風紋と彩音が富治に駆け寄る。富治はサンダーボルトが墜落した場所で倒れていた。体に目立つた外傷などはなかつた。ただ、ところどころやけどを負っていた。

いくら呼びかけても富治は意識を取り戻さない。完全に意識を失ってしまった。彩音は回復魔法で富治のダメージを回復させていがまつたく回復する気配がない。

「風紋！ お前も手伝え！ そいつに寄り添っていても仕方がないぞ！」

剣次が富治をずっと見ている風紋に言った。あたりの東軍兵士達が彼ら四人の周りを少しながら囲み始め、攻撃をしてきていた。

「でも……」

「でもじゃない！ とっととしろ！」

「風紋。富治なら私が何とかするから、あなたは剣次を手伝ってあげて」

富治を治療しながら彩音は言った。彩音たちの回りにはバリアが張られており敵の攻撃は受けずに済んでいた。

「ね？ 風紋。あなたが頼りなのよ。このままじゃ剣次は持たないわ」

「……。わかった。彩音、バリアを解いて」

「がんばってね。富治は私がちゃんと治療するから」

彩音はバリアを解いた。風紋はバリアから出ると、呪文を唱え始めた東軍兵士達にアクアクリスターを放った。

あたりではみなががんばって戦っている。そんなことを知つてか知らずか富治は夢の世界にいた。

あたりは真っ暗だ。何も見えない真の闇。あたりには何かがあり、

富治をそこから動かせない。

「」は一体……？」

自分の声がこだまして自分の耳に入ってきた。

「……ねんよ」

ふつと、何か声が聞こえる。どこかで聞いたことのある声。

「しょうねんよ」

今度ははつきりと聞こえた。そ�だ、ソードシティにいたあの老人の声だ。

「あなたはソードシティの……」

富治はつぶやいた。だが、声はそれを無視して言った。

「少年よ。伝説の剣を三本集めたな。これでおぬしの求める戦争の終結をすることができる。だが、おぬしに置かれている状況はつらい」

「どうにつけどですか？」

「緑の剣を持つ少年は完全に剣のパワーを開放している。おぬしも赤の剣のパワーはほぼ開放しているだろう。だが、青の剣だけはどうしようもない。伝説の剣を一本使つとはい一度胸じや」

「じゃあ、どうしたら……？」

「青の剣は赤の剣と相対するもの。本来ならば同時に開放することはできぬ。だが、開放できる方法はある。

それは”合体”じや」

「”合体”？」

「たいしたことはない。両腕で一本の剣を持てばいいのじや。何も難しいことはあらん。さあ、そろそろ行け。おぬしの帰りを待つている者が三人いるぞ」

それから富治の耳には何も聞こえなくなつた。しばらくたつと、誰かが富治のこと呼んでいる。心地よい気持ちを感じながら。

富治が目を開けた。すると、目に映つたのは彩音だつた。

「よかつた。気がついたのね」

富治は起き上がつた。あたりを見回すとそこでは戦乱が続いていた。彩音に目を戻すと、手には杖を持っている。心地よかつたのは

回復魔法を使つてくれていたからのようだ。

「体のほうは大丈夫?」

「ああ。それより風紋は?」

「大丈夫よ。えっと ほら、あそこで戦つている
彩音はあたりを見回してから風紋を見つけて指差した。

「よかつた。剣次の奴はあそこにいるな。よし、俺も行くぜ!」

富治は剣次のところへと向かおうとした。だが、何もないところ
で何かにぶつかつてその場にしりもちをついた。

「あらごめん。バリア張つてあるのよ」

「それを先に行つてくれよ……」

「ごめんごめん」

彩音はバリアを解いた。解けると富治は飛び出して、剣次のところへと向かつた。

「剣次!」

剣次は五人ほどの西軍兵士と戦つていた。富治はそれに加わりながら話しを続けた。富治は老人に言われたとおりに一本の剣を両手で持つている。

「青の剣のパワーは完全に開放できる兆しが見えた。これからどうすればいい?」

「ならば、剣のパワーを一気に開放する。行くぞ!」

剣次はあたりの兵士たちをおこした風で吹き飛ばした。その時、赤の剣、青の剣、緑の剣が突然光りだした。すると、どんどんと剣のパワーが開放されていくことが持ち主たちは感じ取つていった。

「赤の剣と青の剣よ。剣に秘められし、力を解き放たん。いでよ、剣に宿りし精靈よ!」

「緑の剣よ。剣に秘められ市、力を解き放たん。いでよ、剣に宿りし精靈よ!」

剣がさらに光る。それらのに彼らにはまぶしくない。他のものはまぶしがつているのに……。

「フレイムバースト! アクアエンド!」

「スパイナルトルネード！」

剣に秘められた力が完全に放たれた！ その瞬間、剣の光が一氣にあたりに 世界中に放たれた。

80

ヒューローク

世界中へと広がつていった伝説の剣の光はやさしい光だった。光を受けたものは、やさしく包まれ戦闘心がブラックホールに吸い込まれていくような戦闘心を失つた。

そして、ガイアマウンテンで争つていた兵士達にもその光はやさしく包み込み戦闘心を失わせた。

「一体なにが……？」

東軍兵士も西軍兵士も自分達の領土へと戻つてゆく。争うことを見やめ、倒れているものには手をかし、命を失つたものは他のものたちが担いでつれて行く。

その光景に富治だけではなく風紋、彩音、剣次も驚いていた。放たれた光に包まれただけで戦争が終結するとは思いもしなかったのだろう。

剣次は驚きを解いて、つぶやいた。

「あの光が戦争を終結させる力か……。驚いたな。私が知っていた情報とは違う。じょせん、古代のものに対する情報は正確性がないということか」

「……」

富治はだんまりだつた。その富治のところに、風紋と彩音がやってきた。

「どうやら、これで終結されたみたいね」

「ああ、そうだな」

「どうしたの富治？ 元気がないけど……？」

「なんだか実感がわかなくてさ。本当にあれだけで戦争が終結されたなんて」

「それもそうだろう。私も実感がわかぬ。だが、あの光景を見ただろ？ 兵士達が手をとりあう光景を。そして、戦いをやめたこと。これだけで十分だろう」

それから彼らはそれぞれの故郷へと戻つていった。

彼らが別れてから数日内に東軍首相のラフラと西軍首相のガレフは平和条約を結び、今後、戦争をすることはないとした旨を全市町村に伝えた。その旨は別れた四人にも伝わった。

富治はライトタウンに戻り、町の復旧活動を始めた。ライトタウンにいた生き延びた人々はみなソードシティに行つていたため、富治は予備にいき町の復旧を始めた。

人々は心よく町に戻つて行つた。富治はソードシティの郊外にいつた。あの老人に会うために。

だが、老人はそこにいなかつた。街の人聞いてもそんな老人は知らない一点張りだつた。富治の心には不思議なことが残つた。風紋はランド山に戻り両親と再会した。その後、ランドタウンへと戻り、富治と同じく町の復旧活動を開始した。

彩音はフランクショーシティで、愛している者の帰りを待つた。何日も何日も。そして、ついに再会をした……。

富治たちの心に謎を秘めたまま姿がなくなつた剣次は、イーストシティへとやつてきていた。その姿は富治たちが知つてゐる服装ではなく、剣も持つていらない。

イーストシティで一番大きい家で剣次は生活を開始した。

三本の伝説の剣は今はもう彼らの誰も持つていない。静かに、剣の力が本当に利用される時までずっとハイブリッド神殿で眠つていることだろう。それから何千年とたつても剣は使われず次第にその存在は忘れていった。

かくして富治たちの冒険は閉幕された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3900e/>

戦争と剣

2010年10月8日15時50分発行